かくも日常的な物語 2

満足な愚者

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

春が過ぎて、夏が過ぎれば秋と冬が来るのはこの世の理だ。

菊地　真の兄である青年。

アイドルである妹と普通の青年である兄。

この物語はそんな普通の兄の物語である。

かくも日常的な物語の続編にあたります。

かくも日常的な物語を読まなくても一応話は理解できるとは思います。

この話は、オリジナル小説にアイドルマスター加えた様な話です。

アイマス要素１００％じゃないことにご注意ください。

目次

秋の始まりのプロローグ ―― 1
秋空と青年 ―― 11
生放送は雨と一緒に ―― 18
秋の夜と満月　前編 ―― 28
秋の夜と満月　後編 ―― 36
ある曇りの日の話　前編 ―― 44
ある曇りの日の話　中編 ―― 51
とある曇りの日の話　後編 ―― 59
秋の祭りと雑踏と ―― 67
騒ぎの前の静けさ ―― 76
暗雲 ―― 82
暗中模索 ―― 93

秋の始まりのプロローグ

それを聞いた時、俺は悲しくもなければ怖くもなかった。理不尽だという怒りも後から湧いてきた怒りで、この時はただ、あぁ。やっぱりな……、と諦めの感情がただただ湧いていた。

四方を機械に囲まれ、至るとこにモニターがある整理整頓とは無縁の部屋。地下室にあるその部屋は日光が入るはずもない。それに今は電灯も切っているため、部屋はただ部屋の各地にあるモニターの光で薄明かりがついた状態だった。

そんな部屋の中、一人の男と向き合う。数あるモニターの中の一つの前に椅子に座り向かい合っている。どことなくだらしない男だ。丸い銀縁メガネに不健康そうな白い肌。ぼさぼさの髪はところどこで渦巻いていた。

「ふむ、以上が俺から言えることだ」

どことなく不機嫌に男は言う。目はただモニターを見つめ、口調は抑揚のない淡々とした口調。初対面の人ならまず勘違いされそうだが、彼はこの口調が通常だった。機嫌が良かろうが普通だろうが毎日がこの口調。別に怒っているわけではない。そのことはすでに長年付き合っているため承知のものだ。

「あぁ、そうか」

彼の説明を半分以上聞き流した俺はただただ何もわからず納得した。長々とした説明は俺にとっては意味のあまりないものだった。ただただ結果が全てだった。おそらく相手も分かっていただろう。しかし、彼は全てを分かった上で頷く。

「どうしたいか、ゆっくり考えろ。俺はお前の選択は尊重する」

その日はそのあとただ何も考えず、家に帰った。覚えていることは空が恨めしいほどの青だったと言うことだけ……。

人間、真剣に三ヶ月考えたことは後悔しない。そう、俺は何処かで聞いた。それは学校の先生が言ったことなのか、それとも友達が言ったことなのか、はたまたネットの掲示板で見たのか、それは思い出せない。だけど、俺はあの日から三ヶ月真剣に考えた。季節は秋から冬

真っ只中に移行していた。三ヶ月間真剣に考えた。学校でも、部室でも、バイト先でも、寝室でも。とりあえず、考えた。もともと考えるのは得意じゃなかったので至るとこに脱線した、大きく遠回りをした。その三ヶ月間に怒りも湧いた。理不尽を不条理を嘆いた。でも、結局怒りや嘆きは長くは続かない。俺はそんな感情を長引かせるのが苦手だった。怒りや悔しさはいつの間にか消えていく。ジャンケンに負けた悔しさも運命に負けた悔しさも俺の中では同じだった。

「すまない、こんな遅くに」

あの日から三ヶ月後、俺は彼の部屋を訪れた。季節はすでに冬になり、雪がチラチラと舞い踊る。気温も低く、吐く息が白かった。

「あぁ、もうそろそろ来ると思ったぞ」

突然の訪問にもいつも通り表情も変えず、ただただ抑揚なくそう言う。

三ヶ月前と何も変わらず、混沌とした部屋へ入る。人が住んでいるとは到底思えないが、これが彼の部屋であり、彼の中ではそれが落ち着くのだろう。部屋の中は外よりも幾分か暖かかった。おそらく、数ある機械の発熱により暖かいのだろう。

「それで、これからのことは決まったか？」

あの人同じ場所に座り彼は言う。モニターの光がメガネに反射して冷たい印象を持たせる。

「あぁ、決まったよ。これからのことも、俺がどうしたいのかも」

それは恐らく、あの日に既に出ていたのだだろう。答えはずっと、俺の中にあった。前々からもしかしたら、あるかもしれないと思っていたことが現実になっただけ。覚悟もあった。ただそれを認めるのに時間がかかっただけ。

「そうか……」

そう短く彼は言うとデスクにあったコーヒーを一口。俺も彼もコーヒーはブラックしか飲まない。暗い部屋ではその水面を覗くことも叶わない。

「うん、聞いてくれるか？」

「あぁ」

「――――――」

これからのこと、未来のこと、どうしたいのか、どうするのか、全ての考えを伝える。一番の友人だ。彼にだけなら伝えられる、伝えないといけない。

それは懺悔にも断罪にもにた告白だった。この瞬間、俺と彼は共謀者になったのだ。

外に出た時、時刻はもう日付をまたいでいた。チラチラと降っていた雪は話の間中も降り注いでいたのか、辺りは薄い白へ染まっていた。空を見上げればビル灯りで曇っているのか晴れているのかさえ見えなかった。

今から三年前の高校、三年の冬のある日のことだった。

人通りの多い夜の街を歩く。八月中はまだ日も明るい時間だったが今ではもう夜の帳が降りていた。九月ももう終わると言うのに夏の残り香は強く、街ゆく人々は半袖が多かった。秋と言うには気温が少し高すぎる、晩夏と言った方がしっくりくる季節だった。まぁ、この高い気温も今週までで来週からは一気に秋風が強くなる、そう朝のニュース番組で言っていた。

「今日のゲストは今人気沸騰中の７６５プロダクションの皆さんです！」

高層ビルに埋め込まれているＴＶを見れば見慣れた音楽番組が写っていた。立ち止まり見上げる。そして、見知った顔の女の子たち。変わったな……と思った。

たった、半年前は雑誌に小さく出るだけだったアイドル達が今ではこうして全国放送の音楽番組に出演していている。あの子達の成長の様子を間近かで見ることが出来たため、余計にその成長が目に見えて分かった。あの子たちはこの半年で大きく成長している。それに比べて俺は……。まぁ、そう悲観するのはここまでにしておこう。人間変わらないものは変わらないのだ。

「なぁお前、７６５プロの中で誰が好き？」

「うーん、やっぱ雪歩ちゃんかな。お前は？」

「そりゃもちろん春香ちゃんに決まってるだろ！　あの直向きな態度

の裏は絶対ドＳの一面を持ってるに違いないぜ！　そして、虫を見る様な目で見られて踏まれたい！」
「ごめん、お前の友達辞めていいか？」
　同じ様に立ち止まり大きな画面を見上げていた二人の若い男性の話が聞こえた。いや、この二人だけじゃない。
「きゃー真様よ！　こっち向いて！」
「ちょっと、何言ってるのよー。恥ずかしいじゃない。確かに真様はかっこいいけど、やっぱり７６５プロと言えば竜宮小町っしょ」
　部活帰りだろうか、エナメルバックを持った女子高生も……。
「パパー、大きなテレビにスマイル体操のお姉ちゃんがいるよー！」
「おう、そうだな。好きだもんなスマイル体操！」
「そうね、この前幼稚園でスマイル体操踊ったっていってたもんねー！」
「うん！　僕スマイル体操踊れるよ！」
　若い夫婦と幼い息子も……。
「なぁ、７６５プロで一番運動神経いいのって誰だ？」
「そりゃ、響チャレンジとかで毎週色々なことにチャレンジしている我那覇　響だろ！」
「いやいや、菊地真も相当運動神経いいと聞くぜ」
「ばっかだなぁお前ら、その二人はいかにも運動できますオーラ出してるだろ。そんな奴ダメだ。こう言うのはな若くて、おっぱいの大きい美希ちゃんが意外に一番いいんだよ！」
「それはただお前の好みだろ！」
　俺と同い年くらいの大学生グループも……。
「７６５プロ最近見る機会増えたなぁ」
「そうだな、雑誌の表紙なんかでもよく見るし何より『生っすか!?　サンデー』の影響大きいよな」
「あ、私がラーメン食べたくなっちゃった？」
「いきなりどうしたの？」
「いやさ『生っすか!?　サンデー』の四条　貴音のコーナー思い出して」

「あれ、毎回美味しそうに食べるよね」
「うんうん、それで食べたくなっちゃった！」
「よし、それじゃあ行くぞー！」
　そして、会社帰りのサラリーマンとＯＬのグループも……。多くの人が画面を見上げていた。その状況に思わず微笑みを浮かべると、バイト先までの道を急いだ。最後にもう一度、今度は画面よりも少し上を見上げる。残念なことに星は画面の明るさにかき消されて見えなかった。
　バイトが終わり外に出ると随分と過ごしやすい気温になっていた。肌寒くもなく、鬱陶しい夏のまとわりつく暑さもなく、ただただちょうどいい適温となっていた。
　いつも通りのメールをいつも通りの相手に送る。いつも通りの送信なら返信ももちろんいつも通り、夕食を作って待っているというメールだった。可愛らしい彼女のメールを見ながら思う。もうそろそろこの関係を終わらせるべきだと……。
　もう彼女も半年前の状況ではない。仕事も忙しく、スケジュールが白紙で有ることが今ではないのだ。それに彼女の本文は学生である。学校にも行き、仕事もする。それがどれだけ辛いのか、どれだけしんどいのかそれを一番知っているのは俺自身だ。いくら仕事が忙しいとはいえども、２２：３０には家に帰ってこれる日々がほとんどである。これからもっともっと忙しくなればそれもどうかは分からないが今のところは２２：３０には帰ってきている様だった。今から俺がどれだけ早く帰れたとしてもバスの時間からいって日にちをまたぐ時間になることは避けられない。彼女はどれだけ、早く家に帰ってきても俺が帰ってくるまで夕食は食べない。何度か俺も早く寝てもいいぞ、と言ったのだがそれでも彼女はただただ夕食を作り待っているのだ。
　どれだけ早く寝ても彼女の睡眠時間は一日、四時間から三時間。いくら若いからといって体を動かす仕事が多い彼女だ。このまま行けばいつか倒れてしまうかもしれない。夏休みが終わり、かれこれ約一ヶ月の間、その生活を送っている。もうそろそろ、限界だろう。彼

女も、そして俺も……。

バイト先からバスで三十分ほど言った場所にある茶色いマンションが我が城。建築されてそこそこの年数が経っているため周りに建ち並ぶまだ新しいビルやマンションに比べると年季が感じられる。外見は少し劣るが住めば都と言った様にバス停まで近いし、スーパーも近くにある、通勤通学にも便利なこの場所を気に入っていた。少なくともう、この住み慣れた我が城から越すつもりはさらさらなかった。

四階の角部屋の鍵を解錠し、扉を開けようとすればパタパタと扉の向こうから足音をが聞こえてくる。

「兄さんっ、おかえりなさいっ！」

黒髪のショートヘアに人懐っこい笑み、バイト前に大画面で見た少女だ。犬の尻尾の様に癖毛を揺らす彼女こそ俺の自慢の妹であり、アイドル菊地　真だ。

「あぁ、ただいま。真」

テレビで見たより柔らかい笑みで両手をこちらに出してくる。

「兄さん、荷物受け取るよ」

九月の初めから何か心境の変化があったのか、真は毎日俺が帰るとこうして荷物を受け取ってくれる様になった。もちろん初めは遠慮したが、兄さんの役に立ちたいんだ、と無理に押し切られてしまった。

「いつもありがとうな。真」

そう、いつも通りのお礼を述べて持っていたカバンを渡す。別に入っているものもバイトで使った衣類ばかりで軽く別に持ってもらう必要もないのだが、真の笑顔を見ると何も言えなくなってしまう。

「ううん、いつもご苦労様。ご飯出来てるけど、ご飯にする？　それともお風呂？」

そう首を傾げる。

「何だか新婚の夫婦みたいだね」

その姿に思わず、そんな言葉がでた。

「もう、何言ってるの、兄さん」

数ヶ月前ならこの言葉に顔をあたふたさせていたが、今ではすっかり受け流せるようになってしまった。これも場数を踏んだことによる成長なのだろうか。
「いや、本当にそう思っただけだよ。真みたいなお嫁さんを貰えたら嬉しいなって。可愛いしね、真」
それは本心である。掃除洗濯料理と家事なら何でも全て出来、性格も良し！　それに何と言っても今話題のアイドル　菊地真だ。そんな真みたいな子をお嫁に貰えたのなら男して感無量である。贔屓目が混じっているかもしれないがアイドルと言うことを除いても真は完璧なお嫁さんになることは間違いなかった。
「な、な、何言ってるの！　そんなことないよっ！」
顔を真っ赤にしてカバンを持ったまま手をブンブンと振っていた。危ないからやめなさい。
巷ではクールでカッコいい王子様として、真様という愛称で呼ばれている彼女だが、こんな表情を見ていると、とてもそんな風には見えない。
可愛いなんて言われ慣れたと思っていたが、まだまだこのテンパり様を見てるとそう言うことでもなさそうだ。テレビなんか見てるとそう言うことでもないような気がするんだけどなぁ。
「ちょっと、兄さん。何笑ってるの！」
そんな真の姿が微笑ましくて笑っていた俺を真が半目で睨む。それがまた可笑しくて、笑ながらごめんごめんと謝る。
「もう、本当に兄さんはいきなりなんだから……」
と、顔を真っ赤にしながら呟くように話す。機嫌を損ねてなくて良かった。あまりからかい過ぎると拗ねてしばらく口を聞いてもらえなくなるからな。
「それよりも、今日のご飯はカレー？」
玄関を開けた時から漂っていた匂い。特徴的なその匂いは今や日本の中でも庶民的な料理の代表にもなりつつあるカレーだ。
「うん、今日は時間が空いてたしね。たまには作ろうかなって思って。頑張って作ったからまずくはないと思うけど……」

「何言ってるんだよ。美味しいに決まってるよ。楽しみだよ」
今では六年近く自炊している俺と変わらない腕前の真だ。多分もうそろそろ料理の腕でも勝てなくなるだろうな。悲しいような嬉しいような微妙な気持ちだ。
そんな、真が作った料理が不味いはずはない。それに真が作ってくれた料理だ、どんな料理よりも俺にとっては一番美味しく感じるに決まっているのだ。
「えへへ……」
と真は照れたような笑みを見せる。何はともあれ我が家はいつも通りだった。
机に座り白いお皿に並べられたカレーを一口。
「うん、スパイスも効いててとても美味しいよ」
アレンジしてルーを作ったのか市販のカレーとは違う少しスパイスの効いた匂いがしていた。舌が少しピリっとして程よい辛さが口の中に広がる。
「へっへ、やっりぃ！」
そう彼女は満足そうに笑う。
「兄さん、少し辛めが好きだから色々と香辛料買ってアレンジしたんだ」
「へぇー、アレンジしてここまでの味ができるようになったのか。本当に上手くなったな、真」
もう教えることはないかもな……。家事も出来て運動もできる、そして最近は勉強もよくやっているようだった。凄いと思う反面、心配もする。このまま行けば真は倒れるのではないか？　いくら若くても体の限界というものはある。だからこそ言わなければいけない。真のことを思えば思うほど……。
「えへへへ、兄さんに褒められちゃった。兄さんっ！　誕生日は楽しみにしててね！」
あぁ……。その笑顔を見れば見るほど、何も言えなくなる。真の笑顔を曇らすことはしたくはない。
「あぁ、楽しみにしているよ」

結局、俺はいつも通りそれ以上は何も言えなかった。俺の誕生日は十二月後半、今から後三ヶ月後、冬真っ只中だ。今からその日が楽しみである。
「うんうん！　楽しみにしててよ！」
そう言って笑う彼女の笑顔はとても輝いていた。
「あ、そう言えばバイト前に音楽番組見たよ」
ふと、思い出した話題を降ってみる。
「え、本当？」
「あぁ、全部は見れなかったけどね」
「えへへ、嬉しいな」
テレビでよく見るアイドルが目の前にいる。そのことがイマイチ実感が持てない。
よくよく考えれば俺ってアイドルが作った晩御飯を毎日食べているんだよな……。ファンに暴露たら殺されかねない。真のファンも増えたしなぁ。
真は女性のアイドルの中では珍しくファンも女性の人が多かった。真の売りがカッコイイ女性というキャッチフレーズなので、それも頷ける。真自信普段から俺のお下がりの男服しか着ないこともあり、本人はさほどその売り出しに気にせずやっているようだった。
「真ってテレビで見る時と、家じゃ全然違うよな」
「え、そうかな？」
「うん、テレビで見る時は凛々しいという感じだけどさ」
そのキャラを意識しているのかテレビの中の真は凛々しく、宝塚の男性役のような感じがする。それゆえに女性のファンも多いのだろうけど。
「へー、そうかな。じゃあさ、家の僕ってどんな感じ？」
真がカレーをスプーンで一掬いして口に運ぶと言う。口の横にカレーついているぞ。
「家の真はさ、何か女の子っぽいというか、手のかかる妹みたいな感じだね」
ティッシュを手に取り真の口元についていたカレーを拭ってやる。

どれだけテレビで凛々しくしていようと俺の中での真はいつまで経っても手のかかる可愛い妹だ。それに家の中の表情はテレビの中よりもよっぽど柔らかい笑みでそこらの可愛い女の子と変わらない。

「もう兄さん、子供扱いしないでってば！」

顔を真っ赤にしてブンブンと首を振る。そう言うところも子供っぽく見える要因だ。

「ごめんごめん、そう言えば明日も仕事？」

「うん、明日は雑誌の撮影」

結局その日も真に言い出すことができなかった。その夜は一晩中曇りのままだった。まるで俺たちのこれからを予言しているような気がした。

こうして秋が始まった。何とも言えないモヤモヤを抱えながら……。

秋空と青年

朝、眠たい目をこすりながらベッドから起き上がる。カーテンを開ければ、嫌になるほどの群青が広がっていた。秋の空は高い。なるほど、確かに今日の空は高く感じる。

秋の空が高く見えるのは、確か秋の高気圧が大陸からくるもので、空気が乾いているものが多く、澄んだ青空が見えるからだっけな。昔、読んだ本にそんな話が書いてあったような気がする。まぁそんな雑学を知っていたところで何の役には立たないんだけどな。でも、こんな青い空を見ているとあの全てを知ったあの日を思い出す。この秋空はいつだって俺を憂鬱にさせるのだ。

気温が一気に下がったせいなのか、少し肌寒く感じる。うーん、少し怠い体で精一杯伸びをするとリビングへと向かった。

リビングの上にはラップにかけられた朝食が置いてあった。その横には綺麗な文字で書き置きがある。

『兄さん、おはよう！　朝食作っておいたので食べてね！』

どうやら彼女はもう家にいないみたいだ。

それもそうか、壁にかかっている時計を見て納得する。やけに空が明るいなと思ったが、なるほど既に時計は９：００を示していた。今日は撮影があるため学校は公欠している真は既に事務所だろうか。撮影前に軽くレッスンもやると昨日言っていたことを思い出す。

部屋から持ってきた二つのビンのうち一つを開けて一飲み。ドロリとした舌触りと共に何とも表現できない匂いがして、思わずむせこみそうになる。最近はむせこむことはなくなったとはいえ、それでも何度飲んでもこの味には慣れそうもなかった。思わず苦笑いを一つ浮かべる。

いただきますと手を合わせ真に感謝して朝食を食べる。かき込むように急いで食べる。真の料理をあじわって食べないのはもったいないと思うが、何事もスピード勝負だ。それに食べない方がよっぽど真に悪い。

「ふぅ、ごちそうさま。美味しかったよ。真」

今頃きっとレッスン中であろう彼女に向けて手を合わせお礼を一つ。毎日のように夕食をつくってもらっている上に今日の様に朝食までつくってもらうのは兄としても親としても申し訳ない気持ちでいっぱいである。せめての償いで今日の夕食は俺が作ろうと思う。そして、もう一つのビンを開けまた一飲み。今度はまだ大分ましだとはいえ、好き好んで飲もうとは思えない。良薬は口に苦しとはよく言ったものだ。まぁ、薬ではないんだけどね。

食器を片付けた後、リビングで時計を確認する。出て行くには少し中途半端な時間だ。学校に行くにしては時間が足りない。もう一度寝たら間違いなく起きれない自信がある。

さて、どうしたものか……。

とりあえず、テレビでも見るかと電源をつけて見ればちょうど朝のニュースをおこなっていた。今週のニュースが画面上にピックアップされている。

『アメリカの歌姫がまたもや記録更新。アメリカで今話題の歌姫がアルバムの売り上げでアメリカ歴代一位を更新しました』

今年の春あたりからよく聞くようになった洋楽がＢＧＭとして流れる。何でも向こうの若者に人気らしい。洋楽に詳しくない俺でも知っているくらいだ。相当有名な人なんだろう。

『続いてこちらは日本です。二週連続オリコン一位。今、話題の７６５プロダクション所属の菊地真さんのファーストシングル「自転車」が二週連続のオリコン一位を達成です！』

アナウンサーの女性が笑顔で原稿を読み上げる。ＢＧＭには「自転車」が流れている。オリコン一位か……。真がオリコン一位……。何となく実感はない。雑誌に乗るだけでも精一杯だった真がいつの間にか全国ネットの番組でも良く見かける様になった。そのことを思うと、近くにいるはずの彼女が何処か遠くにいる様な気がして……。

『今話題のドラマの主題歌と菊地真さん自身の人気も合間って二週連続の一位を獲得！　いやー、テンポが良く私も大好きな曲です！』

バイトでドラマ自体は見る機会がないのだが、面白いドラマらしくよくバイト先や大学で話題になっていた。もちろん、真のことも。

俺が兄だと知っている人間は少ないため、巻き込まれることはないのだが、バレたら色々と大変なことになるんだろうなぁ。特に俺と真は普通にしておけばまず、バレることはないため大丈夫だと思うが……。

『オリコン二位も続いて同じく765プロダクションから萩原　雪歩さんで「Ｋｏｓｍｏｓ，Ｃｏｓｍｏｓ」です！』

今度はＢＧＭが変わり「Ｋｏｓｍｏｓ，Ｃｏｓｍｏｓ」が流れる。真の一番の友人でもあり、よく我が家にも遊びに来てくれるのが萩原雪歩ちゃんだ。茶色がかったボブヘアーに白色の肌。活発な真とは反対に大人しそうな印象を受ける。Ｋｏｓｍｏｓ，Ｃｏｓｍｏｓは俺が雪歩ちゃんに抱くイメージとは少し違うノリのいい曲だった。雪歩ちゃんのイメージ的にバラードとか歌いそうだったんだけどね、まぁそっちの方には疎い俺のただの偏見だけど。

『先月の終わりに雑誌の表紙を飾り爆発的な人気になった萩原雪歩さん。今度はドラマの主役も務めるそうですね。今からそのドラマが楽しみです』

そう言えば、この前そんな話も言っていたような気がする。確か、あのカメラマンさんが推薦してくれたんだよなぁ。白い髪をオールバックにしてカメラを構えるその横顔を思い出す。今年の夏に会ってから事あるごとに俺を指名して大きな仕事をくれる人だ。なぜか俺を気に入ってくれている。ちなみに、雪歩ちゃんが有名になったキッカケをつくった雑誌の表紙を撮ったのもその人だったりする。男の人が苦手だった彼女がこの半年で生放送にも出てＣＤも発売している。今では萩原　雪歩を知らない人はほとんどいないくらいだ。

変わったなぁ……。思わずそう小さく呟く。初対面の時は顔を真っ赤にして部屋の奥に逃げ込まれたっけな。クスリと小さな笑みが出る。今となってはそれもいい思い出だ。

あ、そう言えばメールが来ていたなと思い出す。夏の撮影以降、雪歩ちゃんからメールがくるようになった。内容はまぁ、何気ないものだけどファンにバレたら身が危ないかもな……。携帯を開けばメールが三件。

上から萩原雪歩、星井美希、ヒロトと言う風に表示されていた。
最後から順番に開く。
ヒロト。高校時代からの付き合いであり、同じ大学に通う仲間。イケメン。大事なことなのでもう一度言う。イケメンである。そして性格もいい、勿論そんな性格良し、容姿も良しのヤツがモテないはずもなく、ずば抜けてモテる。今まで告白された回数数知れず、断った回数数知れず。俺たちが作っているグループの中でビジュアル担当だ。
そんなヒロトからのメールはノートとレジュメ確保しておいた、というものとしばらく来ていない見たいだけど大丈夫か、というものだった。本当にこう言うことに関してはヒロトやＳＳＫには頭が上がらない。今度何かお礼をしなきゃな……。感謝の言葉をメールで返信する。本当にいい友人をもったものだ。俺には過ぎた友だ。もう一度心の中で頭を下げると次のメールを読む。
星井　美希。真同じく７６５プロダクションのアイドルであり、出会った当時からメールを事あるごとに送ってくれる。容姿はとても中学生には見えないプロポーションを誇り、歳を聞くまでは高校生か大学生だと思っていたくらいだ。金髪のウェーブを描いた髪は腰まで伸び、エメラルドグリーンの双眼の彼女は最近ではファッション雑誌や漫画の表紙を総ナメにしていた。男性からも女性からも人気のあるアイドルとなっている。
そんな彼女のメールは可愛らしい今時の女の子と言う感じのするメールだった。内容は今日の撮影前のお昼ご飯を一緒に食べに行こうというものだ。今日の昼間はプロデューサー代理として、雑誌の撮影の付き添いに行かなければならない。７６５プロダクションには赤羽根さんと秋月さんと言う二人のプロデューサーがいるのだが、いくら二人が俊敏なプロデューサーと言え、これだけの数の人気アイドルの管理は厳しい。そこで俺がプロデューサー代理として手伝いを頼まれることがあった。一応、扱いとしてはバイトという扱いで時給もでる。最近は俺の顔を覚えてくれる人も多くなった。
まぁ、そんなことはさておき、今日付き添うアイドルが美希ちゃん

だったりするのだ。さて、どうしようかな。いくらプロデューサー代理とはいえ、アイドルと二人で食事をとるのはマズイだろうな。誘ってくれた美希ちゃんには悪いが断らせてもらうか。
今日はちょっと用事があるから、今度また赤羽根さんもいる時に三人でどう？　そう返事を打って送っておく。赤羽根さんもいるのなら、そんな間違われる心配もないだろう。
最後に雪歩ちゃんのメールを確認するか、そう思いメールを開けた時だった。
『さて、今日のゲストですが、先ほどのニュースで出ました、今人気沸騰中の７６５プロダクションから萩原　雪歩さんにお越してしていただきました！』
拍手がおこり扉から雪歩ちゃんが出てくる。柔らかいあの時と同じ笑みだ。
メールの内容を確認すれば、今日の朝、ニュースで生出演するから、是非見て欲しいというものだった。なんかタイミングいいなぁ、と思わず少し笑みがこぼれる。
今、見てるよ、頑張って！　と短いメールを送る。着飾る必要はない。
時計を見ればまだ少し時間がある。もう少しゆっくり出来そうだった。
『さて、萩原さんには色々とお聞きしたいのですがよろしいですか？』
『はい、お願いします』
あの頃なら顔を真っ赤にしてうつむいていただろうけど、今では少し余裕のある笑みだ。
『まずは萩原さんといえば、来週からドラマが始まりますが、初めての女優としての演技はどうでしたか？』
『うーん、やっぱり演技というのは慣れないものが多く、苦労しました。共演者の方やスタッフの方にはほんとうにご迷惑をおかけしました』
『なるほどなるほど、恋愛もののドラマでしたけど、苦労したと言うとやっぱりそういう恋する女の子の心情だったりするんですか？』

『そうですね。ヒロインのイメージを崩さないようにするのが大変でした』
『なるほどなるほど、やっぱり初めての演技では慣れないことが多かったみたいですね。では、次ですが萩原さんがアイドルになろうと思ったキッカケと言うのは何ですか？』
『私がアイドルになろうと思ったキッカケですか……。私は気弱で臆病な自分を変えようとしてアイドルに応募したんです。何かキッカケがあれば変われると思って……。私、男の人が怖くて初めの方はプロデューサーとも会話できなかったんですよ』
そう言って成長した彼女は画面越しに笑う。昔の面影はもう、ない。
『へぇー、それは初めて聞きましたね。全くそういう風には今は見えないですけど、何か変わるキッカケがあったんですか？』
『初対面の人にも普通に話せるようになったのはある人の言葉のおかげですね。その言葉は私の金言です。その人がいなかったらきっと、私は何も変われなかったと思います』
『ほうほう、萩原さんを変えたその言葉とは？』
彼女はその質問にしばらく間を開けるとゆっくり言葉を吐き出す。
『〝真っ直ぐに喋れば、光線のように心へ届く〟ですね。私はその言葉のおかげで変われました』
吐き出された言葉は、いつの日か俺が話した言葉だった。
『いい言葉ですね。おっと、時間的に最後の質問になりそうなんですが、それは誰に言われた言葉なんですか？　もしかして、その人は男の人だったり？』
『うーん……秘密です』
最後の質問に彼女はいつも通りの笑みでこう答えたのだった。
『おーっと、最後の最後で意味深な答えをいただきました！　では、最後にドラマの見所をお願いします！』
『ヒロインの茜の精神的成長や困難を乗りこる様子ですね！皆さん、是非みてください！』
『はい、ありがとございました！今日のゲスト萩原雪歩さんがヒロイ

ンを務めるドラマは来週月曜、夜９：００から放送開始です！　皆さんお楽しみに！』

そして、番組が終わる。テレビを消して、少しだけ考える。雪歩ちゃんが先ほどの番組で語ったこと。俺の言葉で変われた。何もできない俺でもこんな人気アイドルの役に立てたという実感が少しだけ嬉しかった。それは勿論、保護者目線で娘の成長を見守る感じでだ。この夏でこの子たちは大きく成長した。

でも、俺は……？俺はもういいんだ。成長しなくても、ただただ彼女たちの成長の手伝いをして成長を見守れたのなら……。

出来ることなら……。

どうせ出来もしないことを願っていてもしょうがない。そんな無駄なことを悩んでも時間は刻々と過ぎていく。悩んでいてもしょうがないなら動くまでだ。

椅子から立ち上がり、スーツに着替える。秋になり随分とスーツが着やすい気温となった。まさか、スーツをこんなに着るようになるとはな。少しだけ小さい親父のスーツを着てタイをきつく結ぶ。そして髪をセットすると玄関の扉を開けた。

真っ青を敷き詰めた空を見るとまた少し憂鬱になる。やっぱり、秋は好きになれそうにもない。

生放送は雨と一緒に

昔から秋が嫌いだった。夏とは違い高く澄んだあの青空を見ると憂鬱になるのを抑えきれない。青を一面に塗ったあの空はいつだって俺を憂愁にさせる。

秋は夏ほどの暑さも、冬ほどの寒さもない。俺はその中途半端な季節が嫌いだ。夏でもない冬でもないその季節はまるでどっちつかずの俺自身を表しているような気がして……。

あのことを知ったのも秋だった。それを意識し始めたのも秋だった。そして、今年の秋は……。せめてもの願いは未来ある彼女たちが飛躍する季節であって欲しいものだ。

空を仰げばどんよりと重い灰色が一面を覆っている。曇りは好きだ。あの青空を見なくていいから……。

半袖よりも長袖を着ている人が多くなった街中を歩く。日曜の昼下がりということもあり人通りは普段よりも多く感じた。平日の日中だとまず見ることがない子供連れや学生たちの姿が見えるからだろう。

すれ違う人を見ながらふと気付いた。傘を持ってくれば良かっただろうか……。多くの人が傘を持っていた。朝の天気予報もろくに見ずに家を出るべきじゃなかったな、と今更ながら遅い後悔。いつだって俺は気付いた時には遅かった。

携帯で時刻を確認するとバイト先へ向かうには少しばかり早かった。

人の流れに逆らうように立ち止まり、上をもう一度見上げる。なんど見ても曇天の灰色が目に入る。少しだけ眺めが悪くなった左も慣れれば苦労はしなさそうだ。

ポツリポツリと額の上に滴が落ちる。秋の天気は変わりやすいとはよく言ったものだ。パサパサと傘を広げる音が辺りに響く。アスファルトが灰色から黒に変わっていく。秋の雨は夏とは違いサラサ

ラと気持ちのいい。いつまでもこうして雨に打たれていてもいいのだが、そうするわけにはいかない。風邪を引いて倒れる時間はないのだ。ゆっくりと雨の中を歩き始める。

あぁ、やっぱり秋は雨がいい。

ブーブーエスＴＶスタジオのある一室。ここでは本日、ある番組の撮影が行われていた。広い観客席は番組観覧者で全て埋まっている。今、人気絶頂の７６５プロが全員レギュラーで出ている番組だ、番組観覧の申し込みもすぐに一杯になり、その観覧権が売買されて問題になるほどだ。女性アイドルの番組とはいえ、観覧者の約半数は女性が占める。７６５プロダクションが成功した一つの要因として女性ファンも多いことがあった。

視聴率も上々、関心度も高いこともありブーブーエス側も力を入れている番組の一つだった。そんな会場の多くの人が視線を集めるのはステージ上にいるＭＣの三人。７６５プロ仲良し高校生トリオである、天海春香、萩原雪歩、菊地真だ。番組名は『生っすか!?　サンデー』。

「響チャレンジ今週は成功するでしょうか？」

「響ちゃんなら大丈夫だよ！」

「視聴者に皆さんも応援お願いしますね！　では、ＣＭの後は『ミキクイズ！』です」

春香がそう言うとスタッフがＣＭに入ったことを伝える。ふぅ、息を吐く三人。だいぶ慣れてきたとはいえ、生放送のプレッシャーはあるようだった。真はペットボトルに入った水を一口の飲むと観覧席に向かって話す。

「会場の皆さんは、響チャレンジ成功すると思いますか？」

響チャレンジとは『生っすか!?　サンデー』の企画の一つ。７６５プロダクションの我那覇　響が毎週、様々なことにチャレンジする企画だ。今週はマラソン。響が放送時間内に無事会場に帰って来れた

ら成功になる。
　真の言葉に観覧席に座っていた人々はそれぞれ反応する。所々から頑張れー、などの声援の声が聞こえてきた。アイドルがこのようにＣＭ中に会場に話しかけるのも、この番組が人気な理由の一つだった。
「残り時間は後、三十分。距離は半分と少し、このままだと行けそうだね」
「うーん、マラソンは後半が勝負だからね。まぁ、響なら大丈夫だと思うよ」
　雪歩の言葉に真は笑顔で答える。雪歩も真も響の失敗は考えてもいない様子だった。
「あ、それで思い出した」
　春香はそう言うと赤い上着の胸ポケットからハガキを取り出す。
「そう言えば、お便りの中に質問で一つあったんだった。えーと、真様と響ちゃんってどっちが運動神経いいんですか？　だって」
「えーっ！　春香、このタイミングで言うの!?」
　番組開始まで残り三十秒。まさかのタイミングの切り出しに思わず真は叫ぶ。
「うーん、確かに響ちゃんも運動神経いいけど、真ちゃんの方が運動出来るイメージがあるなぁ。空手も達人並みだし……。真ちゃん、どうなの？」
「ほら、雪歩も普通に反応しないでよ！」
　真のツッコミで会場に笑いが生まれる。こういった和気あいあいした撮影風景は初回から何も変わらない。
「で、どうなの？」
「うーん、格闘技なら僕の方が出来るけど……。他はどうかな？　同じくらいかな……」
「真ちゃん、格闘技強いもんね」
「うん、教えてくれた人が凄いからね」
　真は自分に空手を教えてくれた兄の友人を思い出す。赤い髪をなびかせる彼女はいつだって真よりも何でも出来、いつだって彼女は真

の憧れであった。それは、今も。そして、これからも……。
「うんうん、ミズ……えっ、ＣＭ明け五秒前!?　ちょっと真、ゆっくりと話している場合じゃないよ！」
「ちょっと！　春香がふったんじゃないか！」
　オチがついたところでスタッフの指折りが０になる。
「「生っすか！」」
　三人一緒にお決まりのフレーズを言う。この切り替えの早さは人前にでることになれているからこそ出来ることであった。その辺りの切り替えは流石トップアイドルと言えるだろう。
「次のコーナーは『ミキクイズ』です！　現場のミキー！」
　メインＭＣの春香が星井美希に呼びかける。スタジオの大きなモニターが切り替わり、特徴的な綺麗な金髪が映し出された。
「はいはーい！　こちらは現場の美希だよ！　今日は本当は大通りでやるつもりだったけど……。さっき急に雨が降ってきたら急遽アーケードに変更するの」
　ミキクイズとは７６５プロダクション所属のアイドルの一人、星井美希の企画だ。街ゆく人を一人、美希が選びその人に五問のクイズを解いてもらう企画である。回答者は正解数に応じて景品をもらえるようになっていた。今週は大通りでやる予定だったが急な雨のため急遽、近くにあったアーケードのある商店街での撮影となった。美希の後ろには数多くの人。テレビカメラが来て、そして７６５プロの美希までいればこの多くの人集りも納得できる。
「まだ番組が始まって以来、全問正解者はいませんが、今日は出るでしょうか？」
「うーん、あのクイズ後半が難しいからね。得意分野でもない限り厳しいんじゃないかな……」
　真の言うことは最もだった。ミキクイズは問題数が上がるにつれて難易度も比例して上がっていく、これまでの挑戦者の中でも五問目を解けた人はいなかった。
「さて、美希。今日の挑戦者は誰ですか？」
　春香の問いかけに辺りをキョロキョロと見渡す。生放送であり、中

継であるからこそ出来るある意味でサプライズ的な企画。テレビ番組には珍しくやらせも何もなかった。
「うーん……。あっ、あの人にするの！」
誰かを見つけたのか美希はカメラを気にせず人混みに入り込む。人混みが大きくざわついたのが画面越しでも分かった。
「ちょっと美希！」
いつもなら近くにいる人を選ぶのだが、今日は違った。その行動に思わずツッコミを入れる春香。カメラマンも慌てて美希の方にカメラを向ける。
「ごめんごめんなの！　今日の挑戦者はこの人に決定するの！」
人混みを掻き分けて出てきた美希は右手に誰かの腕を握っていた。
「えっ！」
人混みを掻き分けて美希に引きずられるようにして出来た人物を見て真は思わず声を漏らす。そして、生放送だと言うことを思い出し、叫ぼうとするのを必死に抑える。横を向けば春香も雪歩も同じような表情だ。どうやら皆、思っていることは同じらしい。
「今日の挑戦者はこちらのおにーさんなのっ！」
元気いっぱいに笑う美希が手を握るのは一人の青年。特別に目立つ容姿をしているわけでもない普通の青年だった。苦笑いを浮かべカメラに手をふるその姿を見て真は一人、心のなかで呟く。
（何やってるのさ……兄さん）
画面の中には毎日顔を合わせる兄の姿があった。

どうしてこうなった……。思わず心の中でそう呟かずにはいられない。カラカラと乾いた笑みが出るのを抑えきれない。
雨が振ってきたため大通りから商店街に入ってバイトまでの時間を潰そうとしていた時だった。視界に映った大きな人混みを見て、ふと気になり近づいたのが運の尽きだったみたいだ。人混みの中心部を覗いた瞬間に目が会い、気づけば手を繋がれ輪の中心に引っ張り込まれていた。

「今日の挑戦者はこの人にするの！」
目の前には腰まで伸びたウェーブを描く金色の髪。エメラルドグリーンの双眼は日本人としては珍しい目の色だ。ニッコリと笑みを浮かべる姿は誰がどう見ても美少女だ。それもそのはず、この金髪の彼女は文字通りアイドルなのだ。それも、ここ最近のファッション誌や雑誌の表紙を総ナメするほどの美少女。プロポーションは大人顔負けな中学生。俺も初対面の時は同い年位と思っていた。名前は星井　美希。真と同じ765プロダクションのアイドルとしてもちろん俺も知っているし、あったこともある。そして、メールまでしている、このことはとても公には言えないけど。
とりあえず、会場にいるであろう我が妹とその友達に向かって手を振っておく。後で何か言われるだろうなぁ……。
「今日の挑戦者はこちらのおにーさんなのっ！」
「あはははは、よろしく」
見慣れたカメラの前に立ってしまったらもうやるしかない。生っすか!?　サンデーは生放送だ。ここで断ったらいろいろとスタッフも春香ちゃんたちも大変だろう。
「おにーさん。私のこと知ってる？」
そう顔を覗き込んでくる美希ちゃん。
「はい。星井　美希さんですよね。応援してます」
知っているも何も一緒に撮影現場にいったこともあるし、メールアドレスも知っている。まぁここでそんなことは死んでも言えないので、美希ちゃんに合わせておく。
「うわー！　美希、嬉しいの！」
そう無邪気に笑いながら俺の顔をしたから覗き込むように見る美希ちゃん。非常に視線が痛い。それにテレビなのにそんなことやって大丈夫なのだろうか。
「ちょっと、美希。そのお兄さん困ってるよ」
そんな時だった、小さな画面の中の真から助けが飛んできた。悪い真、恩にきる。

「うーん、そうだね。でも、おにーさんみたいな人から応援してもらえて美希嬉しいなー」
　そう今度は大人のっぽくクスリと微笑む。なるほど、モテるわけが良くわかった。なんでも765プロダクションで告白された回数No．1だとかなんとか、そう真が言っていたのを思い出す。そんな笑みを見せられたら思春期の男子はイチコロだろう。俺も後、五年ほど若ければ分からなかった。まぁ、真より年下の時点で娘のようにしか見れないんだけどね。
「そう美希さんに言ってもらえると、ファンの俺としても嬉しいです」
「それじゃあ、コーナーに行くね！　おにーさん、生っすか!?　サンデーは見てる？」
　マイクを持ち直しカメラ目線で言う美希ちゃん。どうやら仕事モードに切り替わったみたいだ。
「はい、バイトがない週は楽しみにみていますよ」
「じゃあ、この美希のコーナーも知ってる？」
「もちろんですよ。ミキクイズですよね。楽しみに見てます」
「わー！　おにーさんに見てもらえて美希嬉しいなー！……おっと、また話がそれると今度は春香にまで急かされるから続けるね。年寄りは怖いの」
「誰が年寄りですか！　誰が！」
　春香ちゃんの少しノイズが入った声が聞こえてくる。
「いやーん、お兄さん怖いの！」
　そう言いながら俺の左腕に抱きつく。いや、男としては感無量なんでけどさ、周りの視線や画面越しの三人の目が俺のハートを貫いている。普段は優しい三人なのに怒ると怖い。抱きついているのは美希ちゃんなんだけどな……。いや、結局怒られるのは俺だけどさ。と言うか生放送でこれはやばいような気がする。今更と言えば今更だが。
「ほら美希ちゃん、早くコーナー始めないと……」
　小さな画面の向こうで雪歩ちゃんは笑みを浮かべる。柔らかな笑みだが、俺には分かる。目が笑っていないと。
「分かったなの！　では、改めてコーナーの説明なの。おにーさんに

は今から五問のクイズに挑戦してもらうの！　正解数に応じて、プレゼントもあるから頑張って欲しいの！」
　そう言って美希ちゃんがクリップボードを俺に渡す。回答はこのクリップボードに書くようになっていた。
「今週の全問正解商品は……。なんと、７６５プロダクションのライブ最前列チケットなの！」
　じゃーん、とチケットを取り出す美希ちゃん。７６５プロダクションのライブは発売開始から三十分で売り切れるような人気チケット。それをもらえるなんて凄いな……。
「それじゃあ、問題を始めるけど大丈夫？」
　スタッフから白い五枚程度のボードを貰った美希ちゃんは言う。
「はい、大丈夫です」
「それじゃあ、今週のお題は読書の秋と言うことで文学と言うお題なの！　おにーさんは本とか読む？」
「うーん、まぁ読むと言えば読みますね」
　学部も文系だし、文学なら全問正解も夢じゃないかも。まぁ問題のレベルによるんだけどね。
「おっと、これは期待出来るの！　それじゃあ第一問『国境の長いトンネルを抜けると雪国であった』の冒頭で有名な小説と言えば？』
　そう言いながら問題の書いてあるボードをひっくり返す美希ちゃん。
「制限時間は三十秒なの！　よーい、スタート」
　これは別に悩むほどの問題でもない。この手のコーナーならミズキやＳＳＫならどんな分野でも満点取るんだろうな。
「はい、しゅーりょーなの！　それでは答えどうぞ！」
「はい」
　クリップボードをひっくり返す。
　川端康成で『雪国』だ。俺も大好きな小説の一つ。この有名な冒頭は近代文学の中でも五本の指に入るだろう。
「ピンポーン！　正解なの！　さすがおにーさん、じゃあ時間も押しているので次にいくね！」

美希ちゃんは少し急ぎ気味でボードを見せる。やっぱり、生放送だし時間の都合もあるのだろう。

『小説　蟹工船の著者は？』

これもまだ分かる。作品は読んだことないが有名な小説だ。読もう読もうろと思いながら一向に手が出ない作品の一つでもある。どうしても暗い話を読むと気分が落ち込むしね。

答えを書き、見せる。

『小林多喜二』

これも何とか正解だ。

その次の問題。

『松尾芭蕉の奥の細道の冒頭　　月日は百代の（　　）にして、行かふ年も又旅人なり、（　　）に入る言葉とは？』

奥の細道自体は受験でも良く出てくる。それに松尾芭蕉の俳句も好きなので読んだことはあった。教科書にも乗ってあるしね。記憶の片隅から引っ張り出す。

『過客』

これも何とかあっていた。ふぅ、と一つ息を吐く。多分、ミズキたちも見ているだろうし下手に間違えると後でどやされそうだ。それに真にも兄の威厳をたまには見せたい。まぁ、もともとないと言えばないのだけど。

第四問目、後二問だ。

『暗夜行路，小僧の神様，城の崎にての著者は？』

これもまぁ何とか分かる。大学入試なんかで勉強した近代文学の作品だ。

『志賀直哉』

「正解正解！　凄いの、お兄さん！　ここまで難なく正解してきたの！」

美希ちゃんはそう興奮しながら言う。きっとこれが理系だったら、ボロボロになっていたに違いない。本当に運が良かった。

「では、最終問題なの！　ここまで来たら是非ライブチケット持って

帰って欲しいの！」
　その問いにカラカラとした苦笑いしか出ない。左の様子に慣れるにはまだかかりそうだ。
　真も春香ちゃんも雪歩ちゃんも画面越しにこっちを見ているし、どうしたものかな……。
「はい、頑張ります」
　とりあえず、顔はいつも通り笑みを浮かべておく。笑顔は武器とはよく言ったものだ。
「おっ、それは期待するの！　では、最終問題！」
『夏目漱石はＩ　ＬＯＶＥ　ＹＯＵをどう和訳した？』
　その問題を見たとき、一瞬固まった。思い出すのはある夏の日の夜。あの月明かりの下。
　まさか、ここでこの問題が出てくるなんてな。間の悪さにさらに乾いた笑みが出た。
「さぁ、全問正解なるか！　期待しているの！　お兄さん！」
　美希ちゃんの声援が少し遠く聞こえる。周りの注目も既に痛くは無かった。残り時間も後、わずか。
　結局俺は二つの意味でその問題に答えることは出来なかった。
　背中に背負っていたカバンからカランと一つ音がする。やっぱり秋はどうやっても好きに慣れそうにもない。

秋の夜と満月　前編

秋の虫の声がどこからか聞こえる。秋の香りが強くなり、夏の残り香も僅かとなっていた。ＴＶのニュースは紅葉が見頃だと今朝方言っていたのを思い出す。夜の帳が下りきったためか心地よい秋風が辺りを撫でるように吹いていた。閑静な住宅街にある一軒家にしては少し大きめの庭を眺める。いつでも手入れがされてあるここは、数年前のあの時から変わらない。これだけの家に高校時代から一人暮らしをしている友人を少し妬ましく思うと同時にこの広さなら俺だと落ち着かないだろうなぁという矛盾も覚える。いや、間違いなく落ち着かないので今の狭い我が城で俺は十分だ。縁側に腰掛けて秋風に揺られる。目をつぶれば、秋の香りが弱くだが感じるような気がした。

そんな時だった。パサリと横に座る音がする。目を開けて左を向けば無表情な横顔。銀縁メガネのフレームが月明かりに反射していた。どことなくだらしない印象を受けるのは彼の癖のある黒髪のせいだろうか。いつも同じボサボサの渦巻いた髪を見ながらそう思った。

「やぁ、ミズキとヒロトは？」

そう問いかければ、いつも通りの抑揚のない声で「ふむ、あいつらなら材料を切って準備をしている。俺たちもやるか？」という返事が返ってきた。

「いや、真たちがくるまで時間もあるしね。今から火をつけたじゃまだ早いだろ」

「ふむ、確かにな」

そう言って庭の中央に視線を戻す。そこに一台のバーベキューセットが置いてあった。今日、この家に来たのはこのためだった。ちなみに準備は材料班と道具班で二対二。くじ引きで分けた。俺とＳＫが道具班。ミズキとヒロトが材料班といった具合だった。もちろん、真も来るし、春香ちゃんや雪歩ちゃんも来るみたいだった。まぁ、三人とも収録があるみたいで少し遅れそうだ。

しばらく、無言の時間が流れた。でも、それは気まずい沈黙じゃなく、心地よい時間だ。俺も彼もあまりべラべラと自ら喋る方でもない。それに気を使うほどの間柄でもない、俺たちは共犯なのだ。だからこその沈黙でもあった。
「最近、調子はどうだ？」
唐突にＳＳＫが切り出した。
「いや、別に普通だよ」
そう言って笑う。
「そうか……。ふむ、一応これを渡しておく」
少し考えた後、カバンから物を取り出し、二つの物を俺へと渡す。一つは二本のビン。いつも通りの茶色ビンだ。もう一つは……。
「眼帯？」
「そう眼帯だ。早ければ再来週、遅くても来月の頭にはしておいた方がいい。感づくのが早い姫だと、何かを悟る可能性もあるからな。ものもらいとでも、目を怪我したとでも適当に言っておけ」
なるほどね、手にした眼帯を見て思う。彼にはいつも頭が上がらない。よく他人をみている。俺が分かりやすいだけかと思ったが、それもどうやらなさそうだ。俺が分かりやすければここまでことは進んでいない。
「助かるよ。それとこのビンは？」
カランカランとビンを鳴らしながら聞く。
「何時ものやつより性能を一段階上げたやつだ。これ以上上げるのは今はやめた方がいい。劇薬と毒薬は紙一重だからな」
「なるほどね、やっぱりお前には頭が上がらないよ。感謝している」
「別に気にしなくていい。俺はあの日からお前の行く末をみているだけだ」
「そうか……」
また沈黙が生まれる。真がくる時間まではまだ長針が一周するくらいの時間があった。
「なぁ、お前は将来なんになりたいんだ？」
今度も沈黙を破ったのは彼だった。寡黙な彼にしては珍しい。声

や表情には出ないだけで、機嫌がすこぶるいいのかもしれない。
　将来なんになりたいのか、その問いで思い出すのは今年の夏のファミレスでのことだ。あの時、結局俺は何も言えなかった。
「今年の夏の続きか？」
「ふむ、まぁそうとってもらって構わん」
　将来ね……。その言葉に笑みがこぼれる。乾いた笑みではない純粋な笑み。
「とりあえず、大学を卒業して……。それから、それからどうしようか」
　最近、大学に行ってないし、このままなら卒業も危ないな……と今更ながら遅い危機感を覚える。まぁ、最悪、彼に泣きつけばどうにしかしてくれそうだけど。
「なんだ、まだ決まっていないのか？」
「決まっていないんじゃないよ。何ができるのか分からないから、分からないっていう方が正しい」
　決まってないと言うのはきっと、赤い髪の彼女のように何でも出来る人間が選択肢が多すぎて迷っている時に使うセリフだ。俺の場合はその逆、出来ることが少なすぎて何ができるのか分からない。だから、分からないという言葉が正しいように感じる。
「そうか……」
「逆に聞くけど、ＳＳＫは俺なら何が
　向いていると思う？」
　俺自身よりも俺のことを知っている彼なら俺の向かうべき行き先が分かるかもしれない。
「お前か……。前々から思っていたがお前なら……」
　淡々と話し、ここで一つためをつくると。
「小説家が向いていると思う」
　彼はそう言い切った。
「小説家……？」
　思いの外な言葉が出たため、純粋に口から漏れた。確かに小説は好きだけど……。

「あぁ小説家だ」
「何でそう思った？」
　小説を読むのが好きなのはＳＳＫも知っているだろうと思うけど、それだけで飲む小説家が向いているなんて言うには少し端的なように感じる。例えば野球を見るのは好きだけど、野球をやるのは嫌いな人がいるように、小説を読むのは好きだけど、書くのは別なような気がする。
「お前はこの世の煩わしさをよく知っているからな。俺たちの中で一番、煩わしさを知っている。そんなお前なら住みにくき世から、住みにくき煩いを引き抜いて難有い世界をまのあたりに写すことが出来そうでな……」

「なるほど、漱石か」
「あぁ、漱石だ。続ければ着想を紙に落とさぬとも璆鏘（きゅうそう）の音は胸裏に起こる」
「なるほどね。確かにこの世の憂いや煩いは分かっているような気がする。でも、だからこそ俺には向かないよ」
「ほうそれは何でだ？」
「住みにくき煩いを引き抜いて難有い世界をまのあたりに写すのは詩人や画家の仕事さ。あるいは音楽家や彫刻家の領域だ。漱石はあの冒頭の中で芸術の士という言葉は使っても小説家をそこに入れることはなかった」
　漱石が何故、作家や小説家をこの中に入れなかったのかは俺には分からない。でも、もしかしたらそれは漱石自身が俺のように感じていたからかもしれない。いや、きっとほとんどの小説家はこの芸術の士の中にはいるのだろう。でも、俺にはこの芸術の士になれる気がしない。
「なるほど、確かにそうだったな」
　彼は納得したように頷く。
「それに……」
「それにどうした？」

俺がその問いに答えようとした時、男性にしては高く、女性にしては少し低い声が降ってきた。
「よう、お前らなに話しているんだ？」
悟られないようにビンをカバンの中へと隠すと、振り返る。腰まで伸びた癖のない赤い髪が秋風に揺れる。月明かりが髪の艶で反射していた。彼女のことはどう紹介すればいいだろうか。整った顔と言うより、整い過ぎた顔と言う表現がしっくりくる顔。スタイルもそこらのモデルに引けを取らないばかりか、そこらのモデルよりもスタイルがいいしなやかな身体。特徴的な自慢の赤髪は地毛らしく、出会った当時のままだ。俺の数少ない語彙力じゃ容姿端麗と言う言葉しか出てこないが、それ以上に彼女の容姿は人を惹きつける。
それでいて彼女は頭脳明晰、運動神経抜群だった。全国模試では常に十番以内をキープし、運動においては我が妹の真の空手の師匠を勤めていたくらいだ。その運動神経の良さは真も認める折り紙付きだった。
「やぁ、ミズキ。少し将来の話をね」
そういって手を上げておく。そう、彼女こそかの有名な橘　ミズキその人である。綺麗な花にはトゲがあるとはよく言ったものだ。恵まれた容姿や頭脳、運動神経をもつ彼女だが、なにぶんやることが色々と俺のような一般人と一線を二本も三本も画していた。
彼女伝説は数多くある。例えば他校の文化祭に乗り込んでステージジャックをした、例えば駅前で簡易ステージを勝手に作りミニライブをした、例えば暴走族を一夜にして壊滅させたとか。まだまだ多くある彼女の伝説だが、それのほとんどが事実だから笑えない。特にステージジャックはお手の物で他校の文化祭やウチの高校の終業式や卒業式なんかでは毎回勝手にライブをやったりしたもんだった。ミズキの暴走に巻き込まれたこと数知れず、ともに怒られたこと数知れず。今となってはいい思い出なんだけどね。
「へぇー。あの日の続きか。オレも混ぜろよ」
このように一人称で分かるようにミズキは男っぽい言動が多かった。性格もサバサバしているしね。ただ、ミズキはさっきも言ったよ

うに容姿だけ見れば完璧に近い。だから、よくナンパや告白をされる。大学入学当初とかは凄かった。でも、そこはミズキ。しつこいナンパは文字通り一撃の名の下に意識を飛ばされる。ナンパされたこと数知れず、意識を飛ばした回数数知れず。と、言うわけで最近はミズキをナンパする人間はめっきり減った。それでもまだいる辺りが凄いところだ。

「ヒロトはどうした？」

「あぁ、あいつなら今頃野菜と格闘中だ。オレはもう自分の分が終わったからこっちに来たけどな」

ＳＳＫの問いにそう答えるミズキ。ヒロトも料理はある程度出来るんだけどな、ミズキが捌けすぎるだけだろう。

「ふむ、それじゃあ手伝って来るか」

そういって立ち上がるＳＳＫ。俺も手伝いに行こうと立ち上がろうとすれば目で座っておけと合図される。

「お前が台所に立つなんて珍しいな」

「なに、たまにはやるさ」

ミズキの冷やかしに似た言葉を軽く流すと厨房へと彼は消えて行った。

「とりあえず座る？」

そう聞けば、おう、そうだなという言葉とともに俺の横に腰を下ろすミズキ。

「何か近くないか？」

ミズキが座った場所は俺のすぐ隣だった。肩がもうすぐ触れ合いそうな距離。

「何だ、美女が近くに座って照れてるのか？」

「まぁ、ミズキは美人だからね」

性格を置いておけば完璧なのが彼女だ。

「お、お、お前急になに行ってんだよ！」

顔を少し朱に染め、そっぽを向く彼女。美女や美人なんて言葉は言われ慣れていると思うんだけどなぁ。

「そ、それよりも話の続きだ！　お前は将来何になりたいんだ？」

急いで話を戻そうとする彼女を見てクスリとバレないように笑う。
「それが分からないからさっき、ＳＳＫに聞いてね。そしたら俺には小説家が向いているって言われてさ。ミズキはどう思う？」
「小説家ねぇ……。お前、小説とか書けるのか？」
「うーん、どうだろうね。小説を読むのは好きだけど。書くのはね……。多分書くにしても日常の話になるんだろうね」
戦記やファンタジーを書けるのならきっと俺はここまで悩まない。日常の話しか書けないと思うからこそ俺は小説家になれないのだ。
「日常の話ねぇ。いいじゃねぇか、そういう話が好きなやつもきっといる。少なくともオレはお前が書いた話なら読むけどな」
「そうか、それは嬉しいね。じゃあ、ミズキは俺は小説家に向いてると思うのか」
「確かに小説家に向かないとは言わないし、意外に納得も出来る。お前は確かに能力はオレ達には劣るがある程度のところならそれなりにやれそうな気がする。もちろん、自分一人で無理ならオレを頼れ、少なくとも一緒に頑張ってやる……って何驚いた顔してんだよ」
「いや、まさかミズキがこんなことを言うなんてね。少し驚いたよ」
まさかあの傍若無人を地で行ったようなミズキからこんな言葉を貰えるなんてな。それだけで何故か嬉しくなる。
「ば、バカ野郎。オレもお前のためならやれることはやるつもりなだけだ」
そうソッポを向く赤い髪。
「そっか、ありがとうな。ミズキ……」
その後ろ姿を見ながら言う。耳が赤く染まっているのが見えた。
「別に気にしなくていいぜ。まぁ、とりあえず一作書いて見たらどうだ？　確か漱石が好きだったよな。なら漱石を真似してさ」
「いや、遠慮しておくよ」
「なんでだよ？　結構書けそうな気はするけどな、オレは」
俺が小説を書けようが書けまいが関係ない。
「俺がもし小説を書いたとしてもこの世の煩わしさを取り除いた話はかけそうにもない」

俺が小説家になれない理由はこれだ。この世の煩いを知っている分、その煩いを取り除くことが俺にはもう出来ない。澆季溷濁の俗界をそのままの姿で描写してしまう。
「何言ってんだ。煩いや憂い不条理を書いた小説なら腐る程あるだろ。漱石も明暗の時は則天去私を目指してたんだし」
確かにミズキの言うとおり漱石も不条理を書いたし、有名な太宰治なんかは煩いをそのままの形で抜き出した。
「あぁ、確かにね。でもダメなんだ。それは俺自身が嫌なんだ」
それは俺のエゴだが煩いをそのままの形で筆に乗せる小説を書きたくはない。まぁでも、この理由も言い訳に近いものだ。本当に俺が小説を書きたくない理由は別にある。
俺が小説を書きたくない本当の理由。それは簡単だ。きっと、俺が書けばバッドエンドになる。
結末がバッドエンドと分かっている小説なんか書きたくはないだろ?
「まぁ、お前の人生だ。好きにすればいいさ。何かあったらオレも手伝うからよ」
そう笑顔で言う彼女に俺はただ、お礼を言うしかなかった。
「ありがとう、ミズキ」
「おう、気にするな。それよりも、最近大学に来てねぇみたいだけど、大丈夫か?」
「痛いところを急についてくるな……。ミズキは元からそこまで来てないだろ」
「はははははは。オレは勉強しなくても単位余裕だからな」
なんとも羨ましい限りである。豪快に笑う彼女は悩み事のカケラもないようだった。それから俺たちは少しの間、くだらない談笑を続けた。秋の虫と頭上の満月が静かに俺たちを見守っていた。

秋の夜と満月　後編

秋の虫とともに鉄板の上で肉を焼く音が辺りに響く。光源という光源はなかったが頭上から降り注ぐ光のせいか、庭は全体を見渡す分には困らないほどに明るかった。縁側に腰掛けたまま頭上を仰げば、欠片のみつからない真円を描く月が一つ、暗闇に浮かんでいた。今日は満月だ。

鬱陶しかった蚊もいなくなり、気温も随分下がり過ごしやすい季節となった。いつも半袖を着ていた真が今週からは長袖を着ていることが何よりの証明だ。そして、今の真の格好は上下お揃いの黒いジャージ。俺の高校時代のお下がりだ。はっきり言っていくら変装の意味も込めているからと言ってもその服装はどうだろうか。真のことをよく知っている俺からすれば、いつも通りで似合ってはいるのだが、ファンが真に抱いているイメージと言えば、クールでカッコいい真様と言ったイメージが強いはず。大抵、雑誌やテレビでは殆どメンズ用に近いカッコいいピシッとした服を着ているしな。ファンが見たら色々とショックを受けそうな格好だ。当の本人はそんな俺の心配をよそに鉄板の横で美味しそうに肉を頬張っていた。まぁ、本人があそこまで楽しそうなら俺からはもう言うことはない。俺自身も仕事モードのキリッとした真よりも今の真の方が好きだ。

仕事をするということはお金を稼ぐと言うことだ。そうすればいくら好きで自分で始めた仕事とは言えど苦労や苦痛はつきまとう。仮面だって被らないといけない。どんな仕事だってそうだ。自分を押し殺さないといけないのだ。特に人に見られる真のような仕事ならそれが顕著だ。どんなに辛い時でも、泣きたい時でも笑顔を見せないといけない、イメージを作らなければいけない。

なるほど、劇や小説は第三者の視線に立つから面白いとはよく言ったものだ。アイドルを妹に持つ者として今の真やその周りのアイドル達は努力の上に立っている。そのことは近くで見てきた俺自身がよく知っている。それならせめてプライベートの時間くらいはその仮面をとって束の間の間でも安らいで欲しいと思う。

そこまで考えた時、ふとそれまでの考えが間違えだったということに気づいた。なかなかどうして真やその仲間を見ていると辛さはあるが、どうにも楽しそうに仕事をやっているように見える。

あぁ、そうか。どうやら俺は夜の帳が降りて、秋の青空が見えなくなったことに浮かれて大切なことが分らなくなっていたみたいだ。

真やその仲間は、ミズキ達のように〝もっている〟人達だ。彼女達は俺の何歩も何十歩も先を行っている。いや、こう言うのは適当じゃないな。先を行っていると言うといつかは俺でも追いつけると言う風になってしまう。なら、こう言うのが正解か。彼女達は俺の〝何次元〟も先を行っている、と。世界が違えば、決して追いつけることはない。まして、その世界が一本だけでなく、二本も三本も画されていると最早ただの本やテレビの物語として見ることができる。観客として、第三者として見れば、彼女達の成長や成功を何の損得もなしに喜べ、彼女達の悲しみも共に哀しむことが出来る。

こう考えるだけなら簡単だが、実際にそう思い続けるのは難しい。結局、どれだけ分かっていても割り切れないのが俺みたいだ。

嫉妬や憎悪を感じるのもそれは人間だから仕方が無い、その意見を俺自身に当てはめることはどうにも俺には出来ない。何と無く、それが誠実ではないような気がするのだ。

どこまでも変われない俺自身に思わず乾いた笑みがこぼれる。

そんな時だった。庭の中央の人影からこちらに近づいてくる人影。白い服に黒いズボン、茶色のボブヘアーが秋風に揺れる。左目に力を入れて目を細めるとしっかりあったピントに何時もの温和な柔らかい笑みが写った。テレビや雑誌で見るときよりも更に柔らかい笑みを浮かべながら彼女は手にもっている紙皿をこちらに差し出す。

「どうぞ、お兄さん食べて下さい！」

皿の上には肉や野菜が所狭しといった様子で乗っていた。焼き加減もちょうど良く、いい香りが鼻腔をくすぐる。

「ありがとう、雪歩ちゃん」

そう笑いながら皿を受け取ればずっしりとした重みが手にかかる。どうやら、見た目以上に食材は乗っているらしい。

「真ちゃんやミズキさんが食べる量が少ないって文句言ってましたよ」
そうクスリと微笑むと雪歩ちゃんは手に持った紙コップの中身を飲む。中身はおそらく緑茶だろう。
「はははは。どうにもあの食べようを見てるとね」
バーベキュー開始直後から同じペースで食べ続けている二人を見る。その二人とはもちろん、真とミズキだ。お互い細いのによくそこまではいるものだ。真もミズキも普段はあまり食べない方だから大食らいってわけじゃないんだろうけど。どうせ、ミズキも真もいつも通り意地を張って大食い勝負と意気込んでいるだけだろう。まぁ、黙々と食べるんじゃなく話しながら食べているんだけどね。それでも、ペースが異常だ。ヒロトなんてビールを片手に苦笑いを浮かべながら肉を焼いているしまいだ。
その横でＳＳＫは我関せずと黙々とビールを飲みと肉を食べていた。なんともらしい。
真の親友であり、同じアイドルの春香ちゃんは自分のペースで色々と摘まみながら談笑に華を咲かせていた。こうしてみると春香ちゃんが一番賢いみたいだ。
「なんだか、私もあの食べっぷりを見ているとお腹がいっぱいになってきちゃいました」
雪歩ちゃんはそう言うとポンっと一つ、俺の横に腰を下ろした。
確かにあの様子を見れば食欲はなくなる。かくいう俺もその一人だし。
「とりあえず、そのお皿はお兄さんのノルマだそうです」
「うん、頑張って食べるよ」
皿を横に置き、立ち上がるとうーん、と一つ伸びをする。再び座ると割り箸をとり肉を一切れとり一口。タレの匂いが花を通り抜け、熱い感触が口の中に広がる。
うん、美味しい。
「真ちゃんが言ってましたよ。最近、兄さんとご飯を食べる機会がないって。毎日のように愚痴ってます」

「あー……。それは真の体を思ってね。俺に付き合わせるとどうしても睡眠時間が減ってしまうし」
あの晩夏の日に言おうと決めたことを言えたのは先週の初めだった。そこまで言い出すのに時間かかったのは俺自身がこの関係を心の中の何処か、無意識とか潜在意識とか極微少の意識の中にこの関係が終わらないで欲しいと思っていたからだろう。
でも、もうそう言う我儘を言っている段階ではなくなる。この関係を続けたいと思うのがエゴなら、この関係を辞めるのもエゴだ。俺はただ俺自身のエゴでもってこの関係を終わらそうとしたのだ。
もちろん、真は何時もの通り反対した。でも、そこはファンの皆や春香ちゃん達も真が倒れたら心配するから、理解してくれ、と押し切った。ファンを使うのは卑怯だと思ったが、こうでも言わなければ真は引き下がらないだろう。学校も始まったし、勉強も大変だ。真が目指すのは俺と同じ大学だ。そこまでランクの高い大学では無いとは言え、一応は国公立。今のままなら厳しいラインだ。
真はなかなか首を縦には振らなかったが、結局長い説得の末、折れたのは真だった。それ以来俺と真がともに食卓を囲むことは劇的に減った。それが俺にとっても……いや、お互いにとっても、きっといいことなんだろう。真ももう兄離れをしないといけないし、俺も妹離れをしないといけない。
「真ちゃんもそれは分かっているみたいですよ。でも、お兄さんと食事出来なくて寂しいみたいです。それに、お兄さんが無茶していないか、倒れないかそこも心配みたいです。お兄さんが倒れたら、真ちゃんも心配します。もちろん、私も春香もです。だから、自分の体は大切にしてくださいね」
雪歩ちゃんは少しだけ笑みを崩して、真剣な表情で言う。その言葉は、その表情は何故か俺の心に強く刻まれるように心に残る。
「ありがとう。自分の体は大切にするよ。それと雪歩ちゃん達も体調崩さないようにね。ファンの人たちが心配するよ」
「はい、ありがとうございます」
「あぁ、それとこの前のニュース番組見たよ」

この前のニュース番組とは、雪歩ちゃんがゲストで呼ばれた朝のニュース番組だ。雪歩ちゃんからたまたまメールがあり、時間があったため見ることができた。
「見てくれてありがとうございます。どうでしたか？」
「うん。上手く答えれたと思うよ。そして変わったよね、雪歩ちゃん。もちろん、いい意味でね」
初めて会ったのはもう、半年以上も前になる。その時はまさか雪歩ちゃんとここまで話すようになるとは思わなかった。ここ半年で一番変わったのは間違いなく雪歩ちゃんだろう。男性恐怖症であがり症の彼女とは初対面からしばらくは会話をすることすら出来なかった。
それが今ではＴＶでもちゃんと話せているし、笑顔も見せれている。７６５プロでも一番二番を争うほどのアイドルになっている。昔の雪歩ちゃんを知っている分、その成長はよく分かった。
「そうですか。ありがとうございます」
「うん、ＴＶでもよく見るようになったし、緊張しているような面持ちもないしね」
「それはお兄さんのおかげですよ。お兄さんのあの日の言葉で私は変われたんです」
「あの日の言葉ってあの撮影の時だよね」
それは二ヶ月前、まだ夏真っ盛りの日だった。セミが鳴き、低い青空が覆っていたあの向日葵畑。雪歩ちゃんがブレークするきっかけとなった雑誌の撮影が行われたあの夏の日。あのカメラマンさんの言葉は俺も雪歩ちゃんも一生忘れることはないだろう。厳しい言葉だったが、雪歩ちゃんには必要な言葉だった。
あの日に俺が言った言葉は……。
「はい、あの日です。ニュースのインタビューでも言いましたけど、あの日、お兄さんが喫茶店で言ってくれた『まっすぐに喋れば、光線のように心に届く』この言葉で私は変われたんです。ただ、飾らないで私の心からの言葉を言って、心からの行動をしようと思えたんです。他人じゃない、自分自身で心から思ったことを言おう、そう思っ

たらなんか勇気が湧いてきました。あの日から二ヶ月以上経ってしまって遅くなったんですけど、今更ながらお礼を言わせてください。本当にありがとうございます、お兄さん。おかげで、萩原　雪歩はアイドルになりました！」

あぁ、なるほど。雪歩ちゃんの言葉が心に響いたのはきっと、彼女がまっすぐに喋っているからなんだ。

自分からこの言葉を教えといて今気づくなんてね……。思わず、思い出したのはある小説の一説。『精神的に向上心のないものは馬鹿だ』その小説の中で友人はこの言葉を自分に返され自殺した。自分自身の言葉を返されるのはそれほどまでに辛いことなのだ。その言葉の意味を理解していれば、しているほどその刃は深く胸を抉る。

「いやいや、俺はただ背中を押しただけだよ。雪歩ちゃんなら俺がいなくてもトップアイドルになれたはずさ」

萩原　雪歩は遅かれ早かれトップアイドルに成れる。何なら生まれ変わってもきっとトップアイドルになるだろう。それは才能のある奴らを間近でずっと見てきた俺だからこそ分かる。萩原　雪歩には才能がある。人を惹きつける才能が。それは真も春香ちゃんも持っている才能で、アイドルには欠かせない才能だ。

俺はただきっかけを与えただけに過ぎない。俺がいなくても、誰かが雪歩ちゃんにきっかけを与えたに違いないし、きっかけがなくとも雪歩ちゃんなら自分で変われたはずだ。

「そんなことはないです。お兄さんのおかげで私は変われました！」

そう言ってまた笑顔を見せる雪歩ちゃん。ここで否定しても雪歩ちゃんは引き下がらないだろうし、これ以上言うと雪歩ちゃんの顔を曇らすだけだ。それは無粋である。なら、ここはそれが間違いだと分かっていても首を縦に降る他ない。

「どういたしまして。こんな俺でも役に立てたなら嬉しいよ」

ただただ俺はそう言って笑顔を見せる。表情とは違い、晴れない何かを心の奥に感じながら。

「お兄さん！　ヒロトさんからです。どうぞ！」

そんな時だった、元気のいい声が正面から響く。顔をそちらに向ければ赤のリボンがトレードマークの春香ちゃんが笑顔で立っていた。差し出す手には缶ビールが一本握られている。
「ありがとう、春香ちゃん」
そうお礼を言って庭の中心を見ればヒロトが肉を焼きながらこちらを見ていた。どうやら、今日まだ一本も飲んでいないことがばれたようだ。受け取ったビールの冷たさに思わず目を細めながら横に置く。
「いえいえ、気にしないで下さい。それより、何を話していたんですか？」
春香ちゃんは、雪歩ちゃんとは逆の方向、俺の横に座る。
「普通に雑談だよ。あっ、それよりもさ今さら思い出したけど、あの生放送の日、ごめんね。びっくりしたでしょ」
あの生放送の日とは俺が美希ちゃんに捕まってテレビのコーナーのクイズ番組に出た日のことだ。真には謝ったのだが、まだこの二人には謝っていなかったことを思い出す。二人ともびっくりしただろうな。いきなり、知り合いが出てくれば誰だってびっくりするもんだ。
「いえいえ、そんな謝らないで下さいよ！　ビックリしましたけど、悪いのは美希なんだし」
「そうですよ、お兄さんは謝らないでください」
春香ちゃんと雪歩ちゃんにそう言われ顔を上げる。迷惑を掛けたのは俺だと言うのに優しい子達だ。あの時は悪気はないとはいえ迷惑を掛けたのは俺であることには変わりはない。生放送だしなぁ。司会の三人より俺がテンパりそうだった。
「それよりも、お兄さん」
春香ちゃんが話題を変え、少しだけ真剣な顔でこちらを向く。
「ん、どうかした？」
「お兄さん、今度のライブの日はお暇ですか？」
そのセリフに一瞬だけ言葉が詰まる。ライブか……。
もちろん、765プロダクションのライブだ。真から既にチケット

は貰っている。今回だけじゃない、ライブをする時のチケットは毎回、真から貰っていた。一番前の一番いい席を。
「ごめん、バイトでさ行けそうにないや」
それでも、俺はライブに行ったことはなかった。行きたい気持ちもあるが、行けないのだ。俺は行ってはダメなんだ。たぶん、ライブに行き、壇上の真を見ると俺は……。
「そうですか……。残念です」
その俺の言葉に目に見えて肩を落とす二人を見て、ごめんと心の中で謝りつつも、会話を強引に変えて談笑に持っていくことにする。
アイドルの二人が悲しんでいる顔など見たくはない。
結局、その日俺の皿はそれ以上量が減ることはなく。受け取った缶ビールを開けることはなかった。頭上にはいつまでも浮かんでいる真円の月は俺を嘲笑っているようだった。
秋風が吹き抜ける夜、俺はただ会話が途切れないように必死だった。

ある曇りの日の話　前編

前にも話した通り、俺は秋が嫌いだ。澄んだ高い秋空が嫌いだ。中途半端な気温が嫌いだ。大好きな夏の後にくるこの季節が嫌いだ。夏の疲れを感じさせる秋が嫌いだ。

もちろん、俺自身もそれが八つ当たりに近い恨みだと言うことは重々にして分かっている。秋にたまたま嫌な思い出が重なっただけだ。

でも、運命や人を呪うよりかは季節を恨んでいた方が気も楽だ。人を呪わば穴二つ。人を恨むのも、恨まれるのも勘弁だ。そんな関係は望んでいない。望んではいないのだが……。

それに運命を嘆くのも、人を恨むのも俺にとっては長く続かない感情だ。でも、秋は違う。一年に一度、それも夏が終わり、冬将軍が冬を告げに来るその短い間だけその間だけ、ふと、そのことを思い出すだけだ。

だが、もちろん秋にも良い点はいっぱいある。気温は下がり、過ごしやすくなる。スポーツの秋、読書の秋、芸術の秋……。と、言う様に様々な物に適している季節が秋だ。もちろん、料理をする俺自身も食欲の秋と言われる様に収穫の季節で美味しい野菜や脂の乗った魚が安く手に入るその点は、秋に感謝している。

だから、だからこそこの感情は逆恨みなんだ。行く当てのない感情を吐き出しているだけなんだ、そう誰でもない自分自身に暗示するように何度も何度も心の中で呟いた。

電車が振動を立てながら止まる。自動ドアが開くと多くの人が降りて行く、俺もその波に押されるように乗りホームに降りる。

電車から降りる時に段差で転びそうになった。やはり、長年の慣れと違う感覚に馴染むようになるためには、其れ相応の時間がかかりそうだ。頭では分かっているつもりでも、長年に渡って住み着いた習慣が、何時もの癖がそうはさせない。

まぁ、こればかしは慣れだろう。他の人に悟られない程度に演じて

いければいい。心配なのは真とミズキだが、あの二人とはしばらく会う予定はない。

それに……。左に少し力を入れると左端でぼやけていた向かい側のホームの駅名標がくっきりと写る。それにまだ完璧に使えなくなったわけではない。

電車から降りた人のほとんどは乗り換えなのか、出口改札ではなく、乗り換え用の階段に消えて行った。そんな足早に消えていく人々の黒い背中を数秒見送った後、くるりとその波に踵を返し、改札をくぐった。

この駅は乗り換えが主要な駅だ。駅で降りる半数以上は乗り換えがメインであり、この駅の改札をくぐることはない。都心にあり、空港からも乗り換えなしで一本で来れるのだが、どうにもここの役割は乗り換えという意味合いが強かった。俺自身もここで降りるのは今日を含めても片手で数え切れるくらいしかない。普段からこっち方面に来る機会が少ないということもあるし、電車に乗る機会が昔はあまりなかったということもあるからだろう。我が家は目の前にバス停はあるが、駅までは少しばかり歩かないといけないのだ。

駅から出ると伸びを一つする。サイズが一回り小さいこのスーツにも慣れたとはいえ、やはり動きにくいのは拭えない。他に変えがないためしょうがないと言えばしょうがないので諦めてはいるが。

うーん、と一つ伸びて見上げた空は鉛のような重い雲に覆われていた。今年は珍しく、秋晴れがあまり見られず燻った日々が続いていた。

俺にとっては嬉しいことではあるが、真はすっきりしない何て言って愚痴っていたなぁ。まぁ、真の性格を考えると曇りや雨よりも晴天の方が好きなのは十分分かる。俺の真に対するイメージは青空の下、元気にスポーツをやっている姿だ。曇りや雨空の下にいる風景は想像しにくい。

駅前を見渡すと目的の物は直ぐに見つかった。駅前に目立つように建つ赤い屋根のコーヒーチェーン店。今日、俺がこの駅で降りたのはこの店に行くためだ。

先日のミズキ家で行われたＢＢＱ。その帰り道だった、春香ちゃんから一枚のカードを貰った。なんでも春香ちゃんが喫茶店のコマーシャルに出演した際に貰った物で、この一枚で一日二杯のコーヒーを無料で飲めるとか。有効期限は一年間。こんな物貰っても悪いと断ったんだけど、お兄さんにはお世話になっていますので是非、と握らせられてしまった。

ついでに言えば、そのカードは五枚あるらしく、俺の他に赤羽根さん、真、雪歩ちゃん、千早ちゃんが持っている。ちなみに春香ちゃん自身は無期限顔パスで一日何杯飲んでもＯＫだとか、さすが今では知らない人がいないナムコプロダクションの人気アイドルである。

俺の力でもなんでもないのに無料で何かをもらうと言うのは余りしたくは無いが、一回も行かないと言うのも春香ちゃんに悪いだろう。

そう思いプロデューサー代理としてコマーシャル撮影に付き添った後の帰り道、時間が余ったので、電車で来てみた次第である。今日の撮影はこの駅から二駅ほどいったスタジオで行われていた。もう、付き添った回数も両手では数え切れないくらいになり関係者の人も俺の顔を覚えてくれている人がほとんどになっていた。撮影現場に行けば、ナムコプロダクションのプロデューサーとして挨拶をされ、今後の仕事をお願いされたりする。

世間ではおそらく知らない人がいないほど有名な７６５プロ。テレビでも雑誌でも見ない日はないほどだ。そんなアイドル達に仕事を依頼するに電話じゃ無理だ。もはや、あの頃と違い仕事を取りに行かずとも勝手に舞い込んで来る。お願いする立場かお願いされる立場になった。

だからこそ、直接仕事をお願いされる機会が増えたのだった。その依頼にアイドルのスケジュールを確認し、アイドル本人と話し合い、時間に折り合いをつけ、仕事を受けたり、時には断ったり、とそんな感じで四苦八苦しながらもプロデューサー代理としての仕事をこなしていた。

閑話休題。少しばかり話の回り道が過ぎたな。つまるところ、今は

まだ歯車は上手く回っていると言うことだ。いつ壊れるか分からない、いつバレるのかも分からない。でも、ハリボテでも、偽りでも回り続けている。ならそれ以上に望むことは何もない。俺は歯車を回し続けるだけだ。

曇天の空を仰ぎながら、そう決意を固めた時だった。ポンと方を背後から叩かれ、声をかけられた。

「Ｗｈａｔ，ｓ ａ ｎｉｃｅ ｇｕｙ ｌｉｋｅ ｙｏｕ ｄｏｉｎｇ ｉｎ ａ ｐｌａｃｅ ｌｉｋｅ ｔｈｉｓ？」

珠の様に涼しげに透き通った人懐っこい声だ。そして、日本では学校の授業以外で聞くことはほとんどない英語。いきなりの流暢な英語に驚きつつ背後を振り向けば、一人の女性がたっていた。

まず最初に思ったのは、怪しいと言う一言だった。白いハンティングハットを深くかぶり、目には大きなサングラス、そして口元にはマスクをしている。顔で言えば露出している面の方が少ない有様だ。そんな人を見て怪しいと思わない方が無理だ。

『ねぇ、お兄さん。こんなところで何してるの？』

彼女はまた流暢な英語でたじろく俺に話しかける。

身長は女性にしては高い方らしく、１７０近くはあるだろう。よく見ればスタイルもいい。流暢な英語といい外国の人なんだろうか、手足もスラっと長くモデルの様な体型だ。いや、最近テレビ局や雑誌の撮影現場に行く機会が増え、モデルを生でみる機会が多くなったからこそ分かるが、彼女はモデル以上にモデル体型をしている。細めのジーパンと茶色のセーターというシンプルな格好なのだが、彼女の場合その格好が体のラインを強調し、しなやかな身体が強調されている。

もしかして、本当にモデルかアイドルかをしているんだろうか、とも思ったが、俺の知り合いは７６５プロのアイドルばかりだ。他に俺に話しかけるアイドル何て思いつかないし、外国の人のモデル何て見たことも話したこともなかった。

『あれ。お兄さんって英語出来ないタイプ？』

彼女は俺の顔を下から覗き込む。サングラス越しに目が合った様

な気がした。
『ごめんごめん、少しビックリして』
　まさか、こんな所で英語を使う機会が来るとはな。英語会話に自信があるとは、とてもじゃないが言えないけど、それでも大学に入れるだけの英語力はあったし、英語の授業も大学で受けてきた。発音がうまいわけでもないし、文法があっているかも分からないけどそこまでの間違いはない……はず。
『おぉ、やっぱり出来るじゃん！　こんな美女とお喋り出来る機会ないんだし、ラッキーだよお兄さん！」
　おっかなびっくり話しかけた英語はどうやら通用したらしく彼女はマスク越しにそう笑う。やはり、その声色はマスク越しにも鈴の様に澄んだ綺麗な声だと言うのが分かった。
『いやいや、英語を話す機会何てほとんどないから通用するか心配だったんだ。だけど、大丈夫みたいだね。良かったよ』
　明るく話す彼女にたじろきながら、たどたどしい英語をどうにか返す。
『うん、少し硬い表現でおかしなところもあるけど、概ね大丈夫だよ、お兄さん』
　どうやら及第点はもらえた様だ。しかし、俺が頭の中で翻訳している彼女の言葉はあっているのだろうか。まぁ、高校時代と今でも少し英語を教えてもらっているミズキ曰く、お前はリスニングだけはほぼ完璧に近いとお墨付きを貰っているため大丈夫だとは思いたい。ミズキも英語の発音は流暢だからなぁ。確か両親が海外にいるんだっけな。そりゃ英語が上手いのも納得だ。まぁ、ことミズキとＳＳＫに関しては２、３ヶ国語話せたとしても驚かない、というよりも話せるとか聞いた気もする。
『君にそう言われると英語の勉強が無駄になっていないと思えて嬉しいよ』
『うんうん、この私が言うんだから間違いなし！　まぁ、口語の少しおかしな部分は私が教えてあげてもいいよ！　この私に英語を教えてもらえるって凄い幸運だよ、お兄さん！　一般人が聞いたら血の涙を

流して悔しがること間違いなし！』
　今度は少し難しい表現が出て来たな。ｓｈｅｄ　ｂｉｔｔｅｒ　ｔｅａｒｓって血の涙を流すでいいのかな。自信はないがこう訳す他ない。まぁ、文脈上間違いではないと思うけど。
『はははははは、ありがとう』
　それとやっぱり外国の人のノリは凄い。会って数分と立たないうちにここまでグイグイと来るなんて……。
　向こうでは普通な話かもしれないけど、日本生まれ日本育ちの純日本人である俺はただその勢いにぎこちない笑顔を返すのが手一杯だった。
『うんうん、まっかせなさーい！　で、そういえばこんな所で何をしているの、お兄さん？』
『あぁ、そこの店でコーヒー飲もうと思ってね』
　そう視線を喫茶店に向ける。赤い屋根の下には昼をだいぶ回った時間だと言うのにそこそこの席が埋まっている様に感じた。ＣＭのおかげか分からないけど、繁盛しているようで何よりだ。
『おぉ！　いいね、お兄さん！　いやー、私もちょうどお茶したいと思ってたんだよねぇ！　さぁ、行こっ！』
　そう彼女は言うと俺の手を掴み、歩き出す。余りの展開に戸惑いを隠せないどころかポカンとただ突っ立っているしかない俺。いくら外国の人がフレンドリーだと言っても、まさか一緒に行くような話になっているとは……。何と無くフレンドリーというより傍若無人といった言葉が似合うような気がする。一瞬、紅髪の友人が頭によぎった。傍若無人を体現したような彼女とそれとなく似ている。
『ん？　どうしたの、お兄さん？』
　立ち止まっていることに不思議そうに顔を傾げ顔を覗き込むように見てくる少女。俺が戸惑っていることに気づいたのか、ハッと何かに気づいたのかような顔をした。
『あっ！　大丈夫だよお兄さん、私こう見えてもお金いっぱいもってんだよ！　会計はまっかせといて！』
　マスク越しでも分かる、今の彼女は満面の笑みを浮かべているのだ

ろう。何がどうなっているのかイマイチ理解もできず、俺はただ無邪気に笑う彼女に手を引かれながらコーヒーショップのドアをくぐった。

ある曇りの日の話　中編

『いやー、助かったよお兄さん！　まさか、日本円がないなんてねー』
　トレイを持った彼女は璆鏘のように綺麗な音を奏でながら笑う。トレイの上には白い湯気を立てるコーヒーとドーナツが二個並んでいた。
　店に入る前に言っていったように　彼女は確かにお金は持っていた。持っていたのだが、財布の中にあった通貨は全て外国の通貨だった。分厚い皮の財布の中にはドルやユーロ、そしてルーブルまであった。そこまで各国の通貨があるにもかかわらず円は一円もない、一体彼女はどうやってここまで来たのだろうか。もちろん、ここは日本である。円以外の通貨はそうそう使えない。
　そして、通貨がダメならカードをと、これまた財布から色々とカードを取り出したのだが、いくらチェーン店とはいえコーヒーショップでカード決済が出来る場所など早々ない。結果、レジの上に各国の通貨と色々な種類のカードを並べて色々と英語で交渉しようと頑張る少女に苦笑いを浮かべてオロオロとテンパっている店員さんとテンヤワンヤな状態となっていた。元より俺が支払うつもりだったのでドーナツ代は俺が支払いカードでコーヒー分は賄った。持ち主以外の会計でも使えるか心配だったが、その心配は杞憂に終わり、店員は裏にある春香ちゃんのサインを確認すると手際よく会計を進めて行った。その手際の良さを見ると、このカードを持っている人が何回かこの店に来ているかもなぁ、なんて思った。
　とりあえず、この少女にはコーヒーを飲み終わったら銀行の場所を教えようと思う。確か、駅の反対側にあったはずだ。札束はあっても日本円がなければどうしようもない。
『そもそも、どうやってここまで来たの？』
　少し前を歩く彼女の後ろに問いかける。髪は全て帽子にまとめてあるのか、白いうなじがセーターと帽子の間から見えた。
『いやー、何人かと一緒に来たんだけど……はぐれちゃって！』
　まいったまいった、と彼女は笑う。知らない異国に来て、一緒に来

た人たちとはぐれたにもかかわらず、ここまでノーテンキだと普段の俺が考えすぎなのだろうかと言う考えになる……。いや、そんなことはない。きっと、彼女が特殊なだけだ。

『これから大丈夫なの？』

『うん、大丈夫大丈夫！　姉さんに迎えお願いするから』

明るく笑うと手に持ったトレイを席に置き座る。一番奥の角一つだけ空いていた四人掛けのテーブル。どうやら、運が良かった様だ。

『へぇー、お姉さんいるんだ』

彼女の向かいに座る。彼女はミルクと砂糖を二つずつ入れるとクルクルとマドラーで掻き回す。黒が一瞬にして茶に変わる。どうやら甘いコーヒーがお好きなようだ。

『うん、三人姉妹なんだけどさ、一番上の姉が日本に住んでるんだ。姉さん、なかなかこっちに来てくれないから会うのも半年振り以上だなー』

彼女は混ぜ終わったマドラーの露きりをするとトレイの端に置く。そして、『えーと、日本では何か食べる時に何か言うんだったよね……。えーと、確か……そうそう、「イタダキマス！」だったよね』と呟き、手を合わせる。

俺も彼女に習い手を合わせる。

「イタダキマス！」

「いただきます」

少しおかしな彼女のイントネーション。きっと、俺の英語も彼女からしたらこんな感じなんだろうなぁ。そう思うと思わず笑みがこぼれる。

『へぇー、それじゃあお姉さんだけ日本にいるの？』

『うーん、ウチの家結構特殊でさ、姉さんは日本で一人暮らし、私はアメリカで一人暮らし。妹と父さん、母さんはイギリスの実家と言うかメインで使っている家に住んでるかな。まぁ、父さんは色々飛び回っていないことが多いけどね。この前電話した時はシンガポールの家からオーストラリアへ向かってるって言ってたし』

一瞬、自分の和訳が間違っているんじゃないか、と思った。俺の和

訳が正しければアニメや漫画でも中々お目にかかれない一家だろう。イギリス、日本、アメリカ。世界中でバラバラに暮らしていることになる。事実は小説よりも奇なりとはよく言ったものだ。まさか、こんな家族がいるなんて思ってもいなかった。

ね、少し変わってるでしょ？　そうマスク越しに笑う彼女に、俺はうん、そうだね、と苦笑いを返す他なかった。住んでいる世界が違うと言うのはこう言う時に使う言葉なのだろう。彼女の財布に各国の通貨が入っていた意味が何と無く理解できた。

『それじゃあ、お姉さんに会いに日本まで？』

コーヒーを一口。色は漆黒のまま、コーヒーはブラック以外飲まない。暖かい感覚が口内から喉を通り、食堂を抜ける。香りもいいし、チェーン店のコーヒーにしては当たりな方だ。

『うーん、姉さんに会いに来たっていうのもあるけど、パーティーに出席しに来たのがメインかな。本当はそういうのは妹が行くべきなだけど、妹はロシアのパーティーに行かないといけないみたいでさ。ロシアから日本ならジェット機ですぐなんだけどねー、向こうも向こうで大変みたいでさ。それで姉さんが私を呼んだってわけ、姉さん基本的にパーティーとか出るの嫌いだから。私も久々に連休とれてラッキーってわけだよ。こう見えても忙しいんだ、私』

そう言いながら彼女はマスクを下にずらしコーヒーを啜り、うーん、少し苦いかなぁ、と渋い顔を一つ浮かべた。白い肌と赤い唇が現れる。どうやら彼女は白人の系統のようだ。

『へぇー、それは大変だね。それと、マスクとサングラス取らないの？』

店内に入っても帽子とマスク、それにサングラスを掛けたままの彼女に問いかける。海外では普通かもしれないが、ここは日本だ。幸いにして席が奥のため好奇の視線を浴びることはないのだが、やっぱり違和感があるのは拭えない。

ちなみに、彼女が先ほど言っていたパーティーやらジェット機なんかは無視だ。俺には一生関係のない話だろうし。このパーティーと

いうのも大学生とかがよくやるたこ焼きパーティーとか鍋パーティーとかじゃない本当のパーティーなんだろうな、きっと。そんな話に突っ込める勇気も度胸も俺にはない。触らぬ神に祟りなし、俺に関係のない話なら聞かなくもいい話もあるだろう。
『おかしいかな？』
『いや、おかしいってわけじゃないけど気になってね』
『うーん、お兄さんは見たい？　私の素顔』
そう言うと彼女はドーナツを一つかじり、満足そうに笑った。半分しか顔は見えないけど、それでも彼女の顔は整っていることが分かった。
『気にならないって言ったら嘘になるかな』
『そっか……。うーん、お兄さんならいいかな。本当なら余り見せたくないんだけどね、特別だよ』
彼女はまず、マスクを取り帽子を脱いだ。ぱさりと帽子に丸められていた髪が落ちる。
――――――――銀。
その一言が頭によぎった。首元付近までしかない短い髪は蛍光灯の光を受け白銀に反射する。プラチナブロンド、そう呼ばれる髪色はこの俗世を清くうららかな天上界へと変えるような聖なるものの様に感じられた。
『これ地毛なんだよ。凄いでしょ！』
そう無邪気という言葉がよく似合う笑みを見せ、彼女は最後にサングラスを取る。彼女と目が合う。
紅だった。今まで見たことない様な真紅の瞳が俺を射抜く。銀髪の髪に紅い瞳、そのコントラストが彼女を更に神聖にする。神聖な容姿と対するように彼女の笑みは人懐っこさを帯び、人当たりの良さを滲み出していた。
『えへへ、綺麗でしょ。この瞳』
まるで絵本の中に出てくる不思議の国に迷い込んだ少女の様な風貌でふにゃりと笑う。綺麗と言うよりかは可愛いと言った方がよく似合う少女だ。そして、理解した。俺もだてに今では日本で知らない

人は少ない人気アイドル達とプロデューサー代理として、近くで触れ合って来ていない。その経験が告げる、彼女も間違いなく人の前に立って来た少女だと。今、この場で春香ちゃん達と並んでも何ら遜色ないくらい彼女は人を惹きつける容姿をもっていた。

その彼女の容姿に見とれていたせいか、『ウチの家系かどうか分からないけど時々紅がでるんだよね』という言葉は俺の耳に届くことは無かった。

『もうしかしてアルビノ？』

先天性白皮症とも呼ばれるその症状は赤目と白い肌、それに銀髪が特徴だ。御伽噺に出てくるような容姿から世界一美しい人種とも言われているその人たちに彼女の特徴は一致していた。

『いや、これは完全に違うらしいよ。詳しくは私も知らないけどアルビノにしては肌白くないでしょ？』

確かに彼女の肌は日本人にはない白さを持っているが〝白すぎて〟はいない。白人を生で観たことがないためなんとも言えないが写真などで見た時のことを思い出すと、一般的な白人と言っても差し支えのないレベルだと思う。

『はい！　サービスタイムはここまで、これ以上晒しちゃうと色々と面倒だからねー。あっ、それと今から変装衣装直ししてくるからお兄さん待っててね！』

柔らかな耳に残る声で彼女はそう告げると帽子を被り直し、サングラスとマスクをセットすると足早にカバンを手に取り店の奥、トイレへと消えて行った。

彼女がいなくなった後、少し考える。彼女は一体何者だろうか。俺に外国人の友人はいないどころか海外に行ったことすらない。それにあんな美人なら人種関係なく覚えているはずだ。

銀髪で思い浮かぶのはナムコプロダクション所属の四条貴音という名前だ。美しくところどころでウェーブを描く銀髪に白い肌。経歴も不明なことが多い彼女なら、もしかすれば海外出身の可能性もあ

る。しかし、俺自身彼女と話したことは数える程もないのだが、ある時の何気ない会話で兄弟はいないと言っていた。彼女がそんなことで嘘を付くような人間には思えないため、彼女に兄弟はいないのだろう。　じゃあ一体……。

それにあの駅前の様子を思い出す。すると、どうにも彼女は俺を狙って声をかけて来たように思える。あれだけの人の中から偶然俺に声をかけた、と考えるよりは狙って声をかけたと考えた方がしっくりくるだろう。

もしかしたら、全てはただの偶然だったのかもしれない。俺の考えすぎでたまたまあの場に俺がいて、たまたまあの場に彼女が居合わせただけ。結局俺には彼女の心理も分からなければ考えていることも分からない、いや分かるはずも無かった。

結局、彼女の存在は俺の中では謎のままで終わりそうだ。

『やっほー！　お待たせー！』

俺の答えがここまで至った時、後ろから彼女の声がした。

『おかえり。……随分、変わったね』

振り返ってみれば先ほどと大きく違う彼女がいた。特徴的だった銀色の髪は見えず、代わりに金色の腰まで伸びるウィッグが見えた。綺麗な紅い瞳はカラーコンタクトが付けられ今では青くなっている。その様子がブロンドの髪と合間って彼女の西洋的なイメージを強めている。

『えへへ、似合うでしょー？』

『うん。似合ってるよ』

元のスタイルも顔も良かったからか今の格好でも十分美少女と言える。やっぱり、元が良ければ何をやっても似合うものだ。

「あれ、お兄さんですか？」

そんな時だった。反対側から声をかけられた。日本語で。

「千早ちゃん？」

後ろを振り向けば青みがかかったストレートの髪が目に入った。マスクとサングラスをしているが、声とその髪で俺にはすぐに分かった。

ーー如月　千早。
真と仲の良いナムコプロダクション高校生組の一人であり、よく家にも遊びに来てくれた子だ。青みがかった髪が特徴的で、ナムコプロダクションでは一番と言っていいほど歌が上手い。アイドルと言うよりはどちらかと言えば歌手に近い。特に代表曲の蒼い鳥はナムコプロダクションを代表する曲であり、売上的にも真の自転車、雪歩ちゃんのＫｏｓｍｏｓ，Ｃｏｓｍｏｓを抜いてナムコプロダクション初のミリオンセラーを達成した。それだけ聞いても彼女の歌の上手さと人気の度合いが分かるだろう。今では音楽番組のＭＣも務めることもある少女だ。
「はい、やっぱりお兄さんには分かっちゃいますか？　一応、変装のつもりなんですけど……」
「まぁね、ナムコプロダクションのアイドルなら声だけでも分かる自信があるよ」
記憶力がお世辞にもいいとは言えない俺でも、これだけ彼女達と触れ合って来ていたのなら声だけでも分かる。
「さすがお兄さんですね。それとそちらの方は誰ですか？」
トレイを持った彼女は俺の後ろに視線を向ける。トレイの上のカップからは湯気が伸びていた。
「あぁ、彼女は……」
駅前で声をかけてくれた少女で、と説明しようとした時だった。ガバりと腕を取られる感覚。
『誰って？　もちろん、お兄さんの彼女だよ！』
見てみれば金髪に変身した彼女が腕に抱きついていた。海外はスキンシップが普通だとよく聞くがいきなりここまで来るものなのだろうか。千早ちゃんなんか目を見開いて「ガールフレンド……!?」なんて言ってるし。千早ちゃんが英語ができると言う話はきいたことはないが、恐らく彼女の冗談の言葉は分かったらしい。
「千早ちゃん、冗談だから気にしないで！　彼女とはさっき駅前で会ったばかりだから……」
と、ここまで言って気づいた。ニヤリ笑いながら腕を組んでいる彼

女の先ほどの言葉、あれは完全に千早ちゃんの言葉に対する返事だ。ということは……。
「まさか君って日本語出来る？」
「えへへ、ばれちゃった」
　すると彼女はイタズラがばれた子供のように無邪気に笑い俺の腕を離す。先ほどのイタダキマスとは違い流暢な日本語。声色も変わらず璆鏘の音を奏でている。どうやら今までの話は演技だったようだ。
「まぁ、千早……だっけ？　とりあえず座りなよ、席空いているし」
　どうやら無邪気な笑顔の裏側には食えない一面が潜んでいたようだ。フレンドリーな彼女の微笑みを横目に、疲れたと一つため息を誰にもばれぬように小さく吐くと、千早ちゃんに良ければ座りなよ、と声をかける。金髪の彼女の言うように確かに席は空いているのだ。

とある曇りの日の話　後編

「へぇー、千早は歌手なんだ！　とりあえず、握手して！」
　彼女に千早ちゃんのことを紹介すると彼女は驚いたような声を出し、手を差し出す。
「ええ、ありがとう。えーと……あなたの名前は……？」
　少し戸惑った顔を浮かべながら千早ちゃんはその手を受け取った。
「私……？　うーん……モカ。うん、モカでいいよ」
　カップのコーヒーを啜りながら金髪の彼女、モカは話す。モカと言う名は明らかに偽名だろう。大方今飲んでいるコーヒー豆から取ったに違いない。
「そう、よろしくねモカさん」
「こちらこそ！　よろしくね千早っ！」
　まぁ、千早ちゃんも特段気にしている様子じゃないし俺も特別気にしない。それが本名であろうとも偽名であろうともそれは人の本質には全く関係ない。確かにあの無邪気な笑みの裏には食えない本性が隠されているは間違いない。しかし、彼女は悪い人ではないようだし、それならそれで構わない。名前や見た目で人の本質は測れないのだ。
　歳が近いせいか直ぐに打ち解けた二人を左の端に収めながらコーヒーを一口。少しぬるくなったコーヒーは香りもそこそこに喉を軽く通った。

「そう言えば千早は何してたの？」
　ドーナツをかじりながらモカは千早に問いかけた。茶色のコーヒーはカップの半分ほどまで減っていた。
「えーと、駅前のＣＤショップに行ってて……。今日は好きなアーティストのＣＤ発売だったから」
　千早はその問いに答えながら手に持っていたトートバックから青

いビニール袋を取り出す。駅前にあるチェーン店のＣＤショップのものだった。
　千早の横に座っている青年はその様子を眺め、時々相槌を打っていた。しかし、相槌を打つだけであり会話には基本入ろうとしない。会話をするのが苦手なんだろうか？　とモカは思ったが、先ほどまでの自分と青年の会話を思い出し、それはないか、と思い直す。
「へぇー、千早みたいな歌手でも好きなアーティストがいるんだ」
「ええ、私の目標であり、憧れのアーティストなの。モカも知っていると思うけどこの人は私の目標よ」
　そう言うと千早はビニール袋から一枚のＣＤを取り出す。赤いジャケットに黒い英語の文章。今、世界中で一番有名なアーティストと言われ、歌姫の称号を持つ少女のＣＤだ。本拠地のアメリカでアルバムの売り上げが歴代記録を更新したというニュースは記憶に新しい。
「へぇー千早ちゃん、洋楽も聞くんだ」
　基本的にナムコプロダクション以外の芸能関係に疎い青年ですらそのアーティストは知っているらしく会話に入る。千早が持っていたＣＤに入っている曲は奇しくも青年が今年の夏、雪歩の撮影の付き添いで行った向日葵畑の前にある喫茶店「ひまわり」で流れていた曲だった。
「はい、私の好きな憧れのアーティストです。声も澄んでいて綺麗ですし、何か心に残るものがあるんです！」
　千早は少し興奮気味に答える。普段の落ち着いた千早からは想像しづらい語尾の強さだった。
　モカはそのＣＤを見ると誰にも気づかれぬ様に一瞬目を細める。その瞳は先ほどの無邪気さを感じさせるものではなく、心が心底冷え切る様な冷たい冷たい瞳だった。
「蒼い鳥も彼女のある曲を聞いて思い浮かんだ曲なんです！　私は彼女の様に才能はないけど、いつか彼女の様になりたいな、と思ってます」
　千早の言葉を聞いたモカの瞳がまた一度、温度を下げる。そして、

一瞬嘲笑に似た笑みを浮かべるとモカは瞬きを一つする。再び開いた瞳には先ほどの冷たさは微塵もなく人懐っこいものに戻っていた。
「ねぇーねぇー、千早知ってる？　これはアメリカに住んでいる時に友達から聞いた噂話なんだけどね」
　モカは先ほどと何も変わらない元気な声色で話す。
「千早が好きなその歌姫って、そこまで才能があるわけじゃないかもよー」
「え……？　それって、どういうこと？」
「いや、私も噂でしか聞いたことないんだけどね。その歌姫は才能じゃなくて血も吐く様な努力でそこまで上り詰めたって話。深い絶望を味わって、心が折れて、それでもなおマイクを離すことをしなかった……いや、出来なかったと言った方が正しいね。そこまでして、今の地位を手に入れたのに彼女はいつも心の何処かで怯えているの……。彼女の姉に対してね。完璧な姉が音楽の道に来るのを恐れてるの……笑えるでしょ？」
　そう言ってモカは薄く笑う。千早と青年はモカが唐突に始めた話に口を閉ざす。千早は驚いた様に、青年は目を閉じて何かを探る様に……。
　モカはごめんごめん、暗い話になっちゃって、でもこれはあくまで噂だからね！　と明るく笑う。
「あと、千早。これは私の受け売りだけど出来れば覚えておいて欲しいんだ。千早は歌でお金をもらっているプロだよね。プロなら人に憧れをもっちゃいけない。プロが他の人を目指すなんてしちゃダメだよ。他人を目指しているといつか分らなくなるよ。自分が何のために歌っているのか……。千早はその人になりたくて歌を歌い始めたわけじゃないよね？　もっと、根本的な理由があるはずだ。それを忘れちゃダメだよ」
　モカはそう言うとドーナツを齧る。甘みが口の中に広がる。
（ここま言うつもりはなかったけど、失敗しちゃったかなー）
　目の前に座る青年と千早を見ながら思う。空気は悪いとは言えないが、どこかぎこちないものになっていた。モカとしてもこんな雰囲

気にはしたくはなかったのだが、千早を見ているとどこか放っておけなかったのだ。
（まぁ、でもこのまま行ったら彼女は何処かで挫折する……）
これは予想ではなく確信だった。
（私が出来るのはここまで……。後はこの千早の問題だね。後は空気を戻すかな……）
「ごめんごめん、変な雰囲気になっちゃったね。別の話しようか！千早、お兄さん、この辺りでオススメの料理屋とかあるー？　せっかく日本に来たんだし、何だか日本っぽいもの食べたくて！」
モカにとってこの程度の雰囲気を元に戻すことはわけがない。伊達に場数は踏んできていない。雰囲気を作り出すのはモカの得意なことだった。空気を作るのに必要なのは話術と顔芸の二つでいい。
モカのこの一言をきっかけにまた和気あいあいとした雰囲気に戻っていった。青年はまだ何処か一歩引いてその談笑を眺めていた。

ーーーー食えない人だ。
それがモカが青年と話していて思ったことだった。モカ自身もよく姉なんかからは食えない妹だ、という評価をもらっていたがこの青年はそれ以上に食えない。普通に話していている内は一般的な青年に見える。
モカは仕事柄、家柄から多くの人を見てきた。その中には裏のある人間も多数いる。そんな環境で育ってきたモカだからこそ、人を見る目は鍛えられ、見るだけである程度、人の裏は読める。これはモカが姉以上に優れている数少ない点の一つだった。
モカだからこそ分かる。この青年は一見普通に見えるのだが、間違いなく裏がある。優しそうな顔の裏に腹の底ではドス黒く、濁ったものがあるのは間違いない。そうモカの経験が告げる。そう間違いなくモカ自身の様に……。

まるで実態を掴めない青年にモカはイラつく。ここまで読めない人は初めてだ。裏があるのは間違いない。だが、その深さが読めないのだ。まるで実態がないかの様に掴み所が見当たらない。今もただ黙って話を聞いているだけの様に見えるが、その奥には何を隠しているのかモカには想像出来なかった。

少しの沈黙が席を包んだ時だった。千早の携帯が音を立ててなる。

「はい、千早です。ええ、プロデューサー、はい。今、駅前のコーヒー店でコーヒーを……ええ、お兄さんも一緒です」

どうやら電話の相手は彼女のプロデューサーのようだ。

「ええ、はい。……大丈夫です。駅前ですので。はい、分かりました。すぐに向かいます」

所々で頷きながら千早は電話を切ると青年とモカに向かい直す。

「ごめんなさい、仕事が入ったから行かせてもらうわ」

「俺も付き添った方がいい？」

「いえいえ、お兄さんはゆっくり休んでください。プロデューサーもお兄さんには言わない様にと言われましたんで」

千早はゆっくりと青年の申し出を断るとコーヒーを飲み干し、席を立つ。如月　千早はトップアイドルだ。プライベート中に電話がかかって来ることはもうなれたものだ。

「モカさん、今日は楽しかったわ。また、会いましょう。お兄さんもまた今度家に遊びに行きますね」

そう言うとゆっくりとトレイを持ち立ち上がった。短い間だったが、歳も近いこともあり、千早とモカは随分と打ち解けることができた。

「うん、千早。また会おうね！」

「うん、真も喜ぶし、時間が空いたらぜひおいでよ。それと仕事頑張ってね」

「ええ、モカまた会いましょう。お兄さんも無理はしないでくださいね」

青年とモカの言葉を受け千早は店を出た。空の雲はまだ消えず、重い雲が頭上を覆っているだけだった。

外に出ると頭上の雲はそのままで、青空の欠片も見えなかった。モカも満足したのか横で笑顔で伸びをしている。サングラスに帽子それにマスクという彼女だが、それでも帽子から出ている金髪にスタイルの良さは日本では目を引くものがあるか、駅に向かう人々はチラリとこちらに視線を送っていた。
「お兄さんありがとうっ！　千早とも会えたし、今日は良い日だったよ！」
猫の様に無邪気に笑う彼女。特に何をやったわけではないが、彼女の笑みを見るとこちらまで元気になれる。今日もまた頑張れそうだ。
「あっ、お兄さん携帯持ってる？」
「うん、もってるけど」
「よし、貸して！　えーっと、これをこうしてＯＫ！」
彼女は俺の手から携帯を奪い取る様に取ると、自身のスマホと俺の携帯を操作する。
「はいっ！　これでＯＫ！　私の個人携帯の番号入れといたから！言っとくけど、その番号知ってるの本当に数少ないから光栄だと思ってよー」
帰ってきた携帯には確かに一人分のアドレス帳が増えていた。彼女が何者なのかは結局分らなかった。分らなかったのだが、きっとそれなりに凄い人なんだろう。ＳＳＫ辺りなら何か知っているかもしれない。覚えていれば是非聞いてみたいところだ。
「そんな貴重な番号を俺に教えていいの？」
「いいよ。お兄さんだし……」
経った数分しか話していないのに随分と信用されているみたいだ。やはり、もしかすれば前から俺のことを知っていたのかもしれない。
「もしかしてだけどさ、俺のことを……」
そのことを聞こうとした時だった。唐突に彼女が持っていた携帯が震えた。彼女は番号を確認するとごめんごめんと俺に頭を軽く下

げ電話を取る。
「Алло（もしもし）」
いきなり何処かの言葉を話す彼女。英語と日本を話せてさらにもう一つ言語を話せるなんて流石としか言いようがない。
『やぁ、姉さん久しぶり！　なんでロシア語かって？　まぁ、それはどうでもいいじゃん。うーん、今？　今はねぇー』
俺には理解出来ない言語で喋りながら一瞬俺に視界を向ける。
『お兄さんとお茶してたとこ。お兄さんって誰だって？　そりゃ、お兄さんだよ。……うん。あぁ、マークがうるさいって？　まぁ、さっきから何百って着信入ってたから……。うん、もう帰るよ、迎えよろしくね』
しばらく何かを話した後、彼女は電話を切る。もちろん、俺には話している内容はてんで想像もつかない。
「ごめん、お兄さん。もう、私帰らなきゃ！」
「迎えに来るの？」
「うん、もう来ているみたいだから行くね！」
彼女の日本語を聞いていると、日本人となんら遜色ない。そんな彼女なら、もう何も心配はないだろう。
それじゃあ、またと彼女に手を振ると彼女もそれに合わせて手を振り返す。彼女はそのまま駅から背を向ける。どうやら、俺とは道が違うようだ。
さて、俺も行くか、と駅に足を向けた時だった。背後から声がした。凛とした彼女の声。
「お兄さん……。私はお兄さんが考えている内容全てを分かるとは言わないけど、ヒロインを泣かせるヒーロー（主人公）にだけはなっちゃいけないよ」
雑踏の中にもかかわらず、その声は俺によく届いた。その声に軽く微笑みを浮かべるとゆっくり後ろを振り向く。そこにはやはり彼女の姿はない。あぁ、やっぱり彼女は食えないみたいだ。
でも、彼女は一つだけ勘違いをしているようだった。
「悪いけど俺はヒーローでも主人公でもないよ。だから、泣かせるヒ

ロインなんていないんだ……」

その呟きは誰にも聞かれることはなく雑踏に消えてなくなる。いつの時代も脇役に幸せなハッピーエンドが訪れるなんて奇跡でもなければ無理な話さ。

秋の祭りと雑踏と

少し汚れた大きな窓から表を見れば、青い青い空がよく見えた。

気温もだいぶ下がり秋本番といったことばしっくりくる季節となった。最近は雲りか雨かですっきりしない天気が続いていた１０月も後半。俺は久しぶりに大学へと来ていた。

久ぶりに訪れても劇的な変化はなにもない古ぼけた校舎。何十年も立て直してないのだ。だから二、三か月振りに来たところで何も変わらない。きっと、これから先もこの校舎は何の変わり映えもないまま建っているに違いなかった。

私立大学では有り得ないような壁に入ったひび割れ。俺が入学した三年前からあることを考えると、これから先もこの壁にはヒビが入りっぱなしだろう。いくら国公立の貧乏大学とはいえ見た目にもう少し予算を使ってもいいように感じるが、それがこの学校の特色だと考えればある程度愛着もわいてくる。

校舎に入り少し見渡しただけでもお世辞にも綺麗といえるような校舎ではない。でもだからこそこの大都会の雑踏とした息のつく暇もない外とは違い、時の流れがゆっくりになったような感覚を受ける。

その感覚は嫌いじゃなかった。最近はバイトや７６５プロのお手伝いで忙しくせわしない日々が続いていたため、久しぶりに訪れた大学のこの穏やかな時の流れは俺自身とても心休まる時間となっていた。それにこの大学にはもう三年も通っているんだ。今更、まっさらな新品校舎に建て替えられたところで俺自身としては戸惑うし、きっと変わって欲しくない。それくらいにはこの校舎に愛着もある。

少し立ち止まり息を吐く。まだ息が白いといったことはないが、それでも十二分に夏とは違ってきた。秋は秋でも冬の到来を感じさせる秋だ。今年もあと二か月もすれば終わる。その実感がやけに重く感じる。

――――秋が終われば冬が来る。

この当たり前のことがなんだか今年は少し違った意味に感じられ

る。自然の摂理としてではなくもっと身近でもっと人間味の溢れた意味に……。

さてと、こんなところで変に考えに耽ってもしょうがない。とりあえず、今日学校に来た意味は校舎を見て回るためでも、秋を感じるためでもないのだ。ついでに言えば、授業にでるためでもなかったりする。こちらのほうは学生としてはどうかと自分でも思うが。

もう一度ひび割れた壁を見つめると俺は一人歩き始める。半分になった視界と共に。

教室に入るとそこには誰もまだ来ていなかった。腕にはめている腕時計を見て納得する。それはそうか。集合時間より３０分近くまだ早いのだ。もちろん集まるのはいつものメンバー。

今日はなんでもミズキから直々に集合のメールが入った。何の集合かは俺もわからない。確定では分からないがある程度なら分かる。十月も後半ということは月が替わればすぐにあの時期が訪れる。お祭り好きのミズキのことだ今日の呼び出しも十中八九そのことで間違いないはずだ。高校時代からミズキは思い付きで俺たちを集めることが多かった。大学に入ってもそれは相変わらず。

違うのは高校と違い集まる場所が部室からこの小さな教室へと変わったくらいだろう。

今、俺がいるのはいつぞやのミーティングをした大学内にある小教室。いつもは語学などの少人数制の授業などが行われる教室だ。高校と違い部室を持たない俺たちはこうやってこの教室で集まることが結構あった。

最近で印象深い集まりといえば雪歩ちゃんの高校でライブをやると発表があったのもこの教室でのことだった。思えばあれも半年近くも前の話になる。あれから今日まで長かったのか短かったのか、俺

としてはとてもあっという間だった。あっという間に時が過ぎ、よく知る少女たちはものすごく成長した。
きっとこれから先も時はあっという間に流れ、あの子たちはそのままのスピードで成長するだろう。そのことが俺は嬉しく思うのと同時に誇りに思う。今年の年末には今年一番輝いたアイドルに贈られる賞の授与式もあるのだ。
彼女たちならもしかしたらいけるかもしれない。
破竹の勢いで躍進を続けている彼女たちならば、もしかすれば……。そう思うと年末が楽しみで仕方がない。
そんな時だった。ガラガラと立てつけの悪い扉が音を立てて開く。
「あれ、もう来てたんだ」
姿を現したのは茶髪のイケメン。大切なことなので二度言う。イケメンだ。
「よう、ヒロト。お前も早いな」
長椅子に腰かけたまま手を軽くあげ挨拶をする。ずっと一緒にやってきた仲だ。これくらいの気がおける関係だ。
彼こそ我がグループ男子のビジュアル担当であるヒロトだ。しかし、こいつの特徴は顔がいいだけではない。性格もすごく良かったりする。人を助けたこと数知れず、困った人なら老若男女誰にでも手を差し伸べるのがこのヒロトの生き方だったりする。顔と性格は比例するのかと人知れず考えたことがあったが、実質このグループを仕切っている赤髪の彼女の件があるため一概には言えないようだ。そしてなんとスポーツも抜群にできる。なんでも中学時代にバスケットで全国制覇しているのだ。しかも三冠。もうどこの奇跡の世代だよと突っ込みを入れたくなるレベル。
とにかくだ、顔よし、性格よし、スポーツ万能とくればモテないはずはない。当たり前だが無茶苦茶モテる。
告白された経験数知れず。おそらく俺が出会った男性の中でも一番告白されているに違いない。そこいらのモデルやアイドルとは格が違う。そんな男の敵がヒロトというやつだった。
「久々だね。学校来るのいつ振り？」

長身の彼は少しくぐるようにして教室に入ると俺の座っていた長イスの逆端に座った。
「今学期は初めて来たから……。えーっと三か月振りくらいかな」
「そりゃ長い夏休みだね。はい、とりあえずレジュメとノート。コピーしておいたから後で目を通しときなよ」
ヒロトはそういうと背負っていたカバンからファイルを取り出し渡してくる。本当に頭が上がらない限りだ。俺とヒロトは一緒の学部ということもあり同じ授業をほとんど履修している。俺はこいつがいなかったら三回は留年している自身がある。そのくらいにはヒロトにお世話になりっぱなしだった。

「いつも悪いな」
「いやいや、気にしないでよ。君の家の都合は俺たちが一番よく知っているしね。君の苦労に比べたらこの程度しかできない自分に腹が立つよ」
そうなんでもないように彼は笑う。その笑顔が俺にはとても眩しすぎて目をそらしたくなる。彼は根本から善人なのだ。俺のような悪人とは根底から異なる存在が彼、ヒロトという訳である。
「ありがとう、ヒロト」
お礼は短く端的に。そして気持ちを込める。俺たちの間に感謝を伝えるに長い文書はいらない。ただ心を込めれば相手にも伝わる。
「どういたしまして。ところでさ、今日の集合は何でか知ってる？」
「さぁ、分からないな。まぁミズキのことだし、きっと来月の頭のことだと思うよ。もうすぐその季節だしね」
「あぁ、そっかもうすぐ〝学園祭〟の時期だったね」
学園祭。来月の十一月の一日、二日、三日に行われる学園祭。あまりイベントというイベントがない大学生活において年に一度の特大イベントである。ミズキの今日の呼び出しは間違いなく学園祭にまつわることだろう。
「今年は何かするのかな？」
「さぁどうだろうね。面白いことになりそうだよ。今年は」

涼しげな笑みを浮かべ彼はいう。その笑みを見れば男の俺でもかっこいいと思える。
しかし、その笑みはどこか白々しさがあった。
「お前、何か知ってるだろ？」
「さぁ、どうだろうね……。まぁ話はみんなが来てからにしようよ。どうせミズキから話があるだろうしね」
涼しげな笑みは崩さない。つまりは話すつもりはないようだ。まぁ後三十分もすれば皆も集まることだ。

「そういえば君に聞きたいことが色々とあるんだ。……765プロのプロデューサー代理として働いてるって聞いたけどどんなことやってるの？」
「うーん。普通に撮影について行ったり、各業界の会社にあいさつ回りに行ったり、後は事務処理かな……」
基本的にバイトだということで時間も短く融通もしてもらっている。そんな俺の業務は大体このような感じだった。挨拶回りや事務処理は基本的に人が本当に足りない時だけ。基本的にそんな仕事は765プロの正プロデューサーである赤羽根さんと律子さんの仕事だ。
「へぇー、それってもうほとんどプロデューサーと変わらないんじゃないの？」
「うーん、基本的に俺はバイトだからそこまで重要な案件はないかな。基本的に撮影の付き添いがメインだしね」
「へぇー、それでもすごいと俺は思うよ。ってことは就職もそっち関係に進むつもりなの？」
「就職か……。考えたことないな……」
俺たちももう大学三年生。後、数か月もすると就職活動も本格的に動き出す。そんな中で未来の展望が全くないのは俺くらいじゃないだろうか。だが、不思議と焦燥感はない。どう焦っても覆らない事実というものはあるのだ。
「まぁ、君ならどこに行っても大丈夫だと思うし、焦らず決めればいい

よ」
どこに根拠があるのかヒロトは笑顔で言う。その顔を見るとどうやら本心で言っているようだ。
人がいい彼のことだ。基本的にヒロトは嘘をつけない。嘘をつくのが苦手なのだ。そんな彼を時々羨ましく思うことがある。人間はないものをいつだって誰だって妬むものだ。
「そうかな……。ありがとう」
基本的にうちのメンバーは何故か俺を過大評価している節がある。俺はあいつらと違って何もとりえのない人間なのにだ。何故かみんな信頼し、期待を寄せてくる。
……でも、俺にはその期待が嬉しかったりする。過剰評価であろうと、誤りであろうと、期待されるというのは嬉しいものがあった。何もとりえのない俺だけど友人の期待だけは裏切りたくはない。
そのまま久しぶりに再会したヒロトとしばらく他愛のない話を続ける。教室の窓からは秋の穏やかな斜陽が差していた。

「よう、お前ら全員来てるか？」
ガラガラと大きな音を立てながら乱暴にドアが開けられた。入ってきたのは一人の女性。
紅い紅い長い髪に整いすぎた顔。出ることは出て引っ込むところは引っ込むそんな理想のスタイル。女性としては少し低めの声に男のような口調。何もかもが〝らし〟かった。
橘　ミズキはいつものように時間きっちりに教室に到着した。
「ミズキで最後だよ」
「いつも通りお前で最後だ」
そんな彼女に手を上げてヒロトは挨拶をし、ＳＳＫは抑揚のない声で答える。
「おっ、今日は不登校の不良野郎も来てるな、関心関心！」
「久しぶりだね、ミズキ」

ヒロトに習い軽くて手を上げて笑顔を一つ。
「おう久しぶりだな、なんだか最近忙しそうだが大丈夫か？」
「まぁ、どうにかこうにかやってるよ」
「そうかそうか、まぁサボりすぎて単位落とさないようにな！　お前が留年したら寝つきが悪いからよ」
そういいながら彼女は豪快に笑った。しばらく振りに顔を合わしても何も変わらない。
「痛いところついてくるね。そうならないように頑張るよ」
笑顔でそう返した時だった。ミズキがぐいっと顔を近くに寄せた。
「ん……。なんかお前変じゃないか？」
「あはははは。何の話？」
少しだけ失敗したかもしれないと少しだけ顔色が変わる。ミズキの人を観察する能力を舐めていたのかもしれない。
「さてと、ミズキとりあえず話を進めないか？　俺は三限もある」
助け舟を出してくれたのはいつも通りの抑揚のない声のＳＳＫだった。やはり彼はタイミングに関しては神がかりにいい。何度それで助かってきたことか。
「まぁ、そうだな。よし、じゃあいきなりだが今日の集まってもらった趣旨を説明したいと思う」
教壇の上、ホワイトボードの前に立つとミズキはよく通る声で話す。
「えーっと。色男と天パーには予め言っておいてから知っていると思うが、今日集まってもらったのは他でもない」
彼女はそのままホワイトボードマーカーを持つとボードに文字を書き始める。
お手本のように綺麗に書かれたその文字を見て彼女は満足そうにうなずくと、振り返る。
「文化祭についてだ！」
ホワイトボードに書かれたその文字はある程度予想していたものその通りだった。
「オレたちも、もう三年。来年には四年になる。文化祭もあと二回だ

！　だから、こそ今年の文化祭は派手に行こうと思う！」
「派手にって何をやるつもりだ？　まさか、ステージジャックとかするんじゃないだろうな？」
　最近は落ち着いてきたためそんなことはないと信じたいが、もしすると言うのなら全力で止めるつもりだ。流石に二十歳を超えて人様に迷惑をかけるようなことはできない。
「いや、ステージジャックなんてしないぞ。おい色男！　そっちの首尾はどうなんだ？」
「あぁ、一応伝手を伝って確保は出来たけど……。でも、最終日の午後のステージを確保してどうするのさ？」
　ミズキの問いかけに答えながらヒロトはカバンから数枚の紙を取り出した。一番上の紙には学園祭期間中の野外特別ステージの貸し出しについてと書かれている。
「あれ、ヒロトも知らされていないのか？」
「うん、ただ純粋に学際の最終日の午後の野外ステージを抑えといてしか聞かされてなくてね」
　ヒロトも知らないとは珍しい。基本的に大学に入ってからはヒロトとＳＳＫでいろいろな準備をすることが多かった。それは俺の家庭の事情を知っている皆の配慮だからだ。それを知っているため皆には何も言えなかった。
「よし、流石色男だ！　天パーお前のほうはどうだ？」
「あぁ、無論抜かりはない。任せておいてくれ」
　いつものように淡々とＳＳＫは応える。その抑揚のなさが当たり前のことを聞くなというよな自信に見え来る。まぁ実際彼に関していえばどんなことでも完遂しような男だ。
　一番長い付き合いだというのに、一番わからないのが彼だ。
「で、結局何をするのさ？　ライブなら俺たちだけで午後のステージ全部使うのは長すぎるだろ」
　ヒロトが持ってきた紙を見れば午後のステージは三時間もある。俺たち一グループが使うにはいささか長すぎる時間だった。確かにミズキは人気がある。三時間くらいなら観客の心をつかんで盛り上

げるのは簡単な話だろう。
　でも、俺には三時間という時間はあまりにも長すぎる。そのことは彼が一番知っていると思うが……。
　そう思いＳＳＫを見れば、いつもの無表情。ただ俺に任せておけと言わんばかりだ。
「その件なら大丈夫だ。極秘でいろいろと根配り済みだ。当日はどでかい祭りになるから楽しみにしておけよ」
　ニヤリと笑うミズキの横顔は、まるで悪戯を企む悪ガキのようだった。
「本当に大丈夫なのか……？」
　思わずそう聞いてしまう俺は何も悪くない。高校からの付き合いとはいえミズキとの付き合いは短くはない。むしろ長いほうだと言っていい。彼女の考えが少し常人とは違う破天荒なものだというものは文字通り身をもって体験してきている。
「なんだ？　オレ様のことが信用できないのか？　大丈夫、任せとけ！　いつも通り俺たちが準備するからよ」
　どことなく大丈夫じゃない言葉を彼女は豪快に笑いながら言った。横を見ればヒロトがそれは楽しみだね、と満面の笑み。
　どうやら彼もミズキの見方なようだ。まぁ、今回に限っては俺もそう心配はしていない。ＳＳＫも内容は知っているようだし、ミズキもここ数年落ち着いてきている。なんだかんだ言ってもこの姫様も成長してきているのは間違いない。
「とりあえず、オレ達も勿論演奏するから練習するぞ！　今回は結構ガチでいくぞ！　天パー！　練習日程を出してくれ！　そして、演奏曲は……」
　やけに気合の入っているミズキの声が狭い教室に響いた。それは相変わらずの澄んだ青空。
　清々しいまでの秋晴れの下、俺たちの祭りは始まった。
　これから起こる怒濤の出来事を知らずに、この時の俺はただ笑っていた……。

騒ぎの前の静けさ

すっかり秋に染まった空の下。とある閑静な住宅街のある一軒家。そのある一室に楽器の音が響き渡る。

荒々しくとも繊細に奏でられたその音色はさらに瑠鏘の音の声を絡ませ聴く者の心を魅了する。ただ残念なことは今の俺は自分の演奏で手一杯でそれをじっくりと聞く暇がないというところだろう。

「よしっ！　終わりだ、いい感じじゃねーかっ！」

曲が終わると彼女はギターをかき鳴らしていた手を止めて後ろを振り向く。その整っているというより整い過ぎていると言った言葉がしっくりくる彼女の額には汗が滲んでいた。

「お疲れ、ミズキ」

艶のある紅い髪をなびかせている彼女にそう労いの言葉をかける。半分になった視界でも彼女の輝きは色あせることはなかった。

「あぁお疲れ！　いやーいい汗かいたぜ！」

そう彼女は額の汗を拭いながらギターを置きこちらへと近づく。いくら秋となり気温も落ちてきたとはいえ、楽器を演奏するとなるとまだまだ汗ばむ。

彼女に習い俺も額の汗を拭き取る。ギターはすでに肩にはかかっておらず、地面に置いていた。

――パチン。

乾いた音をたて、俺の掌と彼女の掌が合わさる。

「よし、少し休憩しようぜ。リビングならクーラーも効いてるし」

いつもの男勝りな口調と機嫌がいい笑顔で彼女は言った。

「あぁ、ちょうど俺も喉が少し乾いたところだ」

体力もすでに限界に近かった俺としてもその申し出を断る意味はない。

二人しかいない割には部屋の温度は高すぎた……。

「麦茶でよかったか？」
コップを乗せたお盆を持ちながら彼女はリビングへと入ってきた。髪型は先ほどと変わり後ろで結う、いわゆるポニーテールというやつだ。
「あぁ、ありがとう」
座り心地の良いソファーに腰を預けていた俺は軽く姿勢を正しながらお礼を言う。空調が効いた室内は過ごしやすかった。
「髪型変えたんだね」
「あぁ、汗で首元に張り付いて鬱陶しかったからな」
「そっか、よくにあってるよ」
「そりゃ何たって元がいいからよ」
そう言って笑い合う。いつも通りの会話だった。
カラン。テーブルにコップを置いた際に氷とコップがぶつかる音がした。
その音が少し昔に終わったはずの夏を思い出させる。
「どうしたんだ？　そんな陰気な顔して」
「いや、ただ……。ただ、夏が終わったなぁっと思ってね」
彼女は俺の言葉に首を傾げる。
「何言ってんだ。夏なんてとっくの昔に終わってるだろ？」
あぁ、まったくもってその通りだ。夏なんて終わってたんだ。
俺がそれを認めたくなかっただけで……。
「うん、その通りだね。とっくの昔に夏は終わっていたのかもしれないね」
「……たまーにだけどお前がよく分からなくなるよ」
「ごめんごめん、とりあえずお茶いただくよ」
頭からはてなマークが出ている彼女にそう笑いかける。そう、分かるはずなんかないはずだ。
なにせ彼女の夏はまだ終わってないのだから……。過ぎ行く季節

を懐かしむのはその下へと落ちていった人間だけで充分なのだ。
――いや、そうじゃないといけない。それ以外にどうしろというのだ。先に進むものもいればそこに留まるものもいる。ただ、それだけの話ではないか。
「しかし、ミズキここまで張り切って練習するなんて今度の文化祭何をするつもりだ？」
ミズキには何も関係の話から話題をかえるために少しだけテンションを上げて聞いてみる。
それに話題を変えるついでとはいえ、俺も個人的にすごく気になっていたことだ。あのミーティングから今日で一週間。その間予定が空いている時を狙って徹底的に俺たちは演奏の練習していた。俺もバイトとバイトの合間を縫って参加しているし、ＳＳＫやヒロトの姿もよく見る。
基本的に俺たちはバンドの練習を例えライブ前でも行うことは少なかった。
雪歩ちゃんの高校である南女子高での文化祭での話を思い出してほしい。ミズキの発表が急なのだ。前日に明日ライブやりますとか言われてもロクに練習なんかできるはずはないだろう。無茶が過ぎるってやつだ。
前にも言ったがミズキは大学に入って落ち着いた方だ。では、高校時代はどうだったと言われれば、明日ライブするぞ、とか、今日ライブするぞ、ではない、「よし、思いついた。今から体育館のステージジャックしてライブするぞ！」だ。
何を言ってんだコイツ？　そう思った人は正解だ。貴方の感性は正しい。
――――傍若無人。
それを地で行くのが生きる伝説たる橘　ミズキであり、そして彼女らしさでもある。
思い付きで、しかも今からライブをやるぞで、振り回される俺とＳＳＫの身にもなって欲しい。しかも、ライブだけではなく、好奇心旺

盛な我がお嬢様はそれ以外でも色々と頭の可笑しな企画を提案してくるのだ。流石に今ここでその全てを語るには時間と言うものと原稿用紙というものが圧倒的に足りないので時間と余裕があるときにしたいと思う。

そんな感じだったからライブ前に練習をするしない以前の問題だっていうことが分かって貰えただろうか。もちろん、初めにバンドを組むぞってなった時はそりゃ滅茶苦茶練習した。俺なんて高校一年の夏休みの半分以上をそれに費やしたと言ってもいい。ちなみにその半分とは文字通り半分だ。ミズキの家に泊まり込んで二週間ほど寝る間も惜しんでギターの基礎を教わったのだ。

もちろん、そこまでやっても俺の実力は人並み以下なのはいうまでもない。

まぁ俺以外の三人に関していえば練習というものをしなくても完璧に何事もこなすので練習と言うものを必要としないため、専ら練習と言うのも俺だけのためにあった節もある。俺たちが半ば伝説化しているの原因というのもミズキのカリスマ性に付け加えて演奏技術がプロ並みにあったということもあったのだ。

最早いうまでもないが、このプロ並みと言うの言葉は俺以外の三人を指す。

しかし、思い返せば超美少女カリスマボーカルでその演奏がプロ並みと来ればそれは人気が出て当たり前の話だな。俺でも外部者ならファンになっていたことだろう。

「あぁ、そのことか……」

彼女は氷が浮かんだグラスを右手に持ちながら言う。どんなポーズでも様になる彼女はやっぱり羨ましい。出会った時から彼女の美しさは何時だって変わらない。半分になった視界からでも彼女の輝きはあの時とそん色ないのだ。

彼女はそのままお茶を一口、口に含んだのちにそのままグラスをテーブルに置き、どこか含んだような表情で続ける。

「うーん、どうしようかなぁと思ってな……」

「うん？　どういうこと？」

「いや、ここで言っても良いんだが、やっぱり当日知った方が面白いとも思ってな……」
「なんだそれ？」
流し目で彼女を見るとミズキは豪快に笑いながら、
「いや、やることはどのみち一緒だ。今回は少し特別だからこうやって本当に久しぶりに練習しているけど、オレ達のやることは変わらないだろ」
なぁ、お前も勿論わかってるよな、と彼女は目で言ってくる。
――あぁ、勿論だ。
俺もただ視界のある方の目でそう伝える。
俺たちのやることは例えそれが音楽でもスポーツでも勉強でも変わりはない。
――――全力で楽しむ。
かつて、俺はただその目的のためだけに部活を作った。

「それに、お前は知らないほうがいいのかもしれないと思ってな。当日のお楽しみ、サプライズとでも思ってくれ」
どこか悪だくみを企てたような笑みでミズキは言う。
その笑みを見て俺はもうどうにでもしてくれと苦笑いを浮かべるのだった。
俺の持っているコップには既に水はなかった。
「まぁ文化祭のことは当日楽しみにしているとして、ＳＳＫ遅くないか？」
「ん？　そういえばそうだな」
今日は最終的にミズキの家に集まることが出来る日だった。ヒロトはバイトの関係上、夕方からだが、ＳＳＫは正午には顔を出すと昨日のメールで聞いていた。
「うん？　……そういえば、確かに遅いな……」
ミズキが壁にかかっている時計に目をやり、そして訝しげに目を細める。
時計を見れば十二時を五分ほど過ぎた時間。遅刻と言えば遅刻だ

が、特段気にするような時間ではないように思える。しかし、これがＳＳＫなら話は別だ。変人であり、超人でもある彼は時間は必ず守る。電波時計も真っ青な正確性で待ち合わせ時間の五分前にそこに現れるのだ。嫌な縁でかれこれ中学時代からの付き合いだが、彼が時間に遅れたことは公私共に聞いたことすらなかった。

ちなみに、これは余談だが、ミズキも時間に遅れたことを見たことがない。ただし、ＳＳＫと違うところは彼女は時間じゃジャストに来るところだ。

「何かあったんだろうか？」

「さぁ……？　まぁいくらあの天パーだからと言っても色々あるわけだし特段気にするようなことはないんじゃないか。人間どうしようもなく時間に遅れることはある」

「まぁ、それならいいけどな……」

さほど、重要に感じてないのか、伸びをしながらリラックスするミズキ。そんなミズキにつられて俺は深く考えるのをやめてしまった。

この時俺はまだ気が付いていなかった。

今まで例え電車が止まっても何かしらの手段で来るような彼が時間に遅れるようなことがあるのはよほどのことがあったからだと……。

それから時間にして十五分、彼にしては珍しくその無表情面が少しだけ焦りを帯びた顔でやってきた彼が右手に抱えてきたのは今日発売の一冊の雑誌。その一面には大きく７６５所属のアイドルであり、俺もよく知る如月　千早ちゃん過酷な過去が載っていた……。

暗雲

「アイドル如月千早の隠された真実。お姉ちゃん――姉の千早の下に駆け寄ろうとした弟は、車に撥ねられ、この世を去った。当事、千早は8歳。その場に居た人々の証言によれば、千早は弟を助けようともせず、ただ傍観していたと言う。何故彼女は、弟を見殺しにしたのだろうか。写真は弟の墓前で言い争う千早と母親の姿だ。ちなみに、千早の両親は、数ヶ月前に離婚している。事故死、家庭崩壊、離婚、彼女の周囲には不幸が積み重なっていく。そんな呪われた素顔をひた隠し、如月千早は今日も歌う。何も知らないファンの前で……なにこれ、まるで千早ちゃんが悪いみたじゃない！」

午前中までだったミニライブが終わり、楽屋で昨日の記事を読んでいた春香は雑誌を握るつぶさんばかりに思いっきり握力を込める。しかし、女子高生である春香の握力では雑誌が握りつぶせるわけもなく、軽く皺をつくる程度に留まった。

酷いというものではない。これではまるで自分の親友が悪いみたいではないか！　まるで不幸を呼ぶアイドルのような扱いで書かれている。

実際にネットを少し漁ってみればそんな書き込みやブログは昨日から山のようにあった。

こんな記事認められていい筈がない。

「うん、これは酷い。私もそう思うよ春香」

横を見れば春香と雑誌を共有して一緒に読んでいた雪歩が普段の穏やな表情ではなく、むっとした表情をしていた。

雪歩もこの出鱈目な記事は許せないようだ。

「千早、大丈夫かな……」

春香は少し皺の付いた雑誌を机の上におくと座っていたパイプ椅子の背もたれに全体重をかけ、体形を崩すと、そのまま天井を仰ぎ見た。天井ではどこか白い蛍光灯が三本、規則的に並んで収まっていた。

この記事を見た千早は相当のショックを受けたはずだ。昨日の段

階では健気に何事もないかの様に振る舞っていたが、無理をしていたことは春香の目でもはっきりと分かった。
「大丈夫だと思いたいけど……」
雪歩はここまで言うと少し言い澱んだ。
そして少しの静寂の後に顔を上げるとハッとした表情を作り、
「ねぇ、春香。思いついたんだけど、千早ちゃんのレッスン会場に今から行かない？　確か、午後からだって昨日言ってたし、それにここにいる三人は今日これから仕事オフだったよね！」
いつもなら仕事終わりはプロデューサーである赤羽根か律子、そしてプロデューサー代理である真の兄、もしくは事務員である小鳥が迎えに来るのが通例だが、例のゴシップ記事の対応に追われて全てのアイドルの送り迎えが厳しくなったため、プロダクションから近い場所での仕事があった春香たちはその場で解散と言われていた。
「うん、それはいいアイデアだよ雪歩！　よし、そうと決まれば直ぐに行こうよ！　レッスン場もここから近いしね！」
雪歩の提案に春香はそれはいいアイデアだとすぐに賛成の意を示すと立ち上がり、そしてこの部屋にいるもう一人へと目線を配る。
「ねえ、真。真も行くよね！」
春香と雪歩から少し離れた椅子に座っていた同じナムコプロ所属のアイドルである菊地真に声をかける。かけると言っても春香にとっても雪歩にとっても真はすでに来るのが当たり前と思っていたため行くための準備を促すような形になっていた。
それだけこの三人は気がおける間柄というわけだった。
「……」
「……真ちゃん？」
春香の言葉に何も返さずその場でただ座ったままの真に雪歩は近づくと声をかけた。
「うん、あ、ごめん……。ボーっとしてたよ。ごめんごめん」
どこか魂が抜けたような顔をしていた真は声をかけられるとはっとしたような表情になる。
そして照れくさそうに笑いながら後ろ髪を掻いた。

「もう、どうしたの真？　珍しいね真がボーっとするなんて」
「あっ、もしかして寝不足？　お兄さんも最近夜遅いみたいだし……」
「いやいや、そんなんじゃないよ！　最近ボクは早く寝てるしね！
多分ライブが終わってほっとしてただけだよ」
　雪歩と春香に真は心配しないようにと元気に応える。
「それならいいけど……。そうだ、今からレッスン場に言って千早ちゃんの様子を見に行こうって話鳴ってたんだけど真も行くよね？
　千早ちゃん昨日の記事できっと傷ついていると思うんだ。酷いよね、ネット上では不幸を呼ぶアイドルとか書かれているんだよ！」
　真は来ると確信していた春香と雪歩はイスから立ち上がり真の方を見る。真なら、よし行こう！と言うに違いない、三人の付き合いは短くなないのだ。これくらいのことは分かる。
　しかし、真の口から出た言葉、二人の予想とは違ったものだった。
「ごめん」
「うん、じゃあ早速行こうか……って、え？」
　頷くと思ってばかりいた真の予想外の言葉に雪歩は思わず聞き返した。
「ごめん、今日は用事があって……。だから、急ぐんだ。ごめんね、春香、雪歩」
　真は小さな声でそう言うと、急いで部屋から出て行った。
「どうしたんだろ真ちゃん……」
　雪歩の呟きが真に届くことはなかった。

（油断した……）
　青年の脳裏にまずよぎったのはこの四文字だった。可能性として想像していなかったわけではない。常にありうると頭の中にあった

事柄だった。ここ数年そういうこともなかったためどこか油断していたのかもしれない。
　青年が思い出すのは一つのゴシップ記事。
　あれだけ有名になっていたのだ、ゴシップ記事の一枚や二枚書かれて当然。むしろここまで書かれなかったのが奇跡に近い。
「お前にしては珍しいな。こんなことになるなんて、アイツと真のことになったらお前は今まで完璧に処理してきたというのに……」
　一般の一軒家よりは少し広いリビングに女性の声が響く。この家の主である紅い髪が特徴の女性だ。
「そうだね、Ｓにしては珍しいよね」
　そしてもう一人男が話す。声色からだけでも分かる優しさ。茶髪の彼はいつも通りの爽やかさに成りを潜めて話す。
　今この家にいるのはこの三人。いつもならここにもう一人この三人の中心となる青年がいるはずなのだが、今日は来れていない。
「何も言い返す言葉がない。色々と昨日から調べてみたが、どうやら７６５プロのライバルプロダクションである９６１プロダクションの社長の仕業らしい」
　予め７６５プロと９６１プロの因縁の様な関係性を調べておいたと言うのにこの様だ。甘い考えは捨ててあの時、確実に手を打っておくべきだった。
「９６１プロと言えば俺でも知っている大手じゃないか……なんでそんなことを」
「社長同士が旧知の仲だ。黒井社長の方が７６５プロの快進撃を許せなかったのだろう」
　青年は迷惑だという風にメガネを中指で上げる。こんな私情でここまでのことをされればたまったものじゃない。
「なるほどね。業界最大手か……。ならお前の情報網を掻い潜って記事を書かせることくらい出来るかもな……そして、一度出回ってしまえばとりあえずはこの騒ぎが落ち着くまでは何も手出しできないか……」
「そうだな。それが問題だな」

一度表に出回ってしまえばその騒ぎが一段落するまで何も手出しはできない。騒ぎが小さければまだどうにでもなるのだが、今や765プロダクションの如月千早はアイドルでも指折りの存在。そんな彼女の記事が騒ぎを起こさないわけがなかった。

既に騒ぎを力づくで抑えれる範囲は十二分にオーバーしているのだ。

「千早のことは別に可愛そうだとは思うがどうでもいい。問題はあいつ等だな」

紅髪の彼女、橘ミズキは顎を手にやり考え始める。

「まぁそうだよね。確かに千早ちゃんも問題と言えば問題だけど、俺たちが考えるのは別だよね。で、これからどうする訳？」

そう、ここにこの三人が集まったのはこれからどうするかの話し合いだ。そして、そのこの三人は特段、千早のことを心配していなかった。

「どうするもこうするも、とりあえずは何も出来ないから現状を見守ることだろうな。文化祭もあと一週間と少しだしな。それまでにこの問題が片付けばいいが……。それと目下その間はアイツの情報をもらさないことだろうな」

リーダー不在のため半ばリーダー扱いのミズキは茶髪の青年、ヒロトの問いかけに答える。

「あぁとりあえずはそうなるだろうな。俺も文化祭までは情報をもらさないように厳重に対処する。それと出版関係の知り合いにも当たってみる。言っては悪いが如月千早のこの程度の不幸でここまで騒ぎになるんだ。アイツと姫の家庭事情がばれればそれどころではなくなるぞ」

確かに一般的に見れば千早の家庭も十分不幸な部類に入る。

しかし、彼と彼女の家庭事情はそれに輪かけて酷い。そんなネタを記者たちが黙っているわけはないだろう。一応表向きは青年のコネとコンピューター技術さえあればいくらでもねつ造は出来る。

……しかし、どこからか綻びがでないとは限らないのだ。これからは細心の注意を払わないとな……。

青年、ＳＳＫはそう心の中で決意を新たにしながら、親友のこれからを祈った。

「……はい。――その、あの記事のことですか？　はい、それは今確認中でして――え、今度の千早のＣＭの採用を見送る!?――それは、何とかできないでしょうか？　……ええ、記事が記事ですが……縁起が悪いってそんな!?　考え直してはくれませんか？　……無理ですか」

「はい、こちら７６５プロです。――はい、今日の週刊誌の件でしょうか？　ただいま確認中ですので今のところは何もコメントできないです……ええ、すみません」

鳴りやまない電話。ナムコプロの事務室はコール音が鳴り響いていた。その対応にナムコプロダクション正規プロデューサーである律子さんと事務員である音無さんが目まぐるしく追われている。俺もそちらの対応を手伝いたいところだが、バイト扱いでもある俺に出る幕はなく、二人が手を付けられない代わりのデスクワークのフォローを慣れないパソコンで行うのが精一杯だった。

カタカタと慣れない指の動きでキーボードを叩くが、この調子でいけば終わるまでに後三日はかかりそうである。もちろん、このデスクワークというのは一日の仕事であるから、その仕事に三日もかかると負の永久機関完成である。そんな永久機関は勘弁してほしい限りだ。

これでは手伝っているのか邪魔をしているのか分からない。久しぶりに使うキーボードは打ち間違えが多かった。上手く動かない指に苛立ちを覚えて焦ってまたミスを繰り返す。先ほどからこれのループだ。

いや、苛立っている原因は打ち間違えもあるが、それよりももっと別にある。とてもじゃないが誰にも言えない、黒い黒い感情が昨日から沸々と湧いているのが自分でも分かっていた。

もう二十年以上俺は俺をやっているのだ。自分の感情は自分が一番よく分かっている。

気持ちを落ち着かせるためにペットボトルに入った水含み、再びキーボードへと向かう。

もう一人のプロデューサーである赤羽根さんは渦中の千早ちゃんと歌のレッスンのためここにはおらず、事務室の奥のテーブルではナムコプロダクションの社長である高木社長自らも電話対応をしている有様だった。

事務室にある三台の電話は終始鳴りっぱなしであり、途切れることはない。少なくとも、俺がナムコプロに駆け付けた時からずっとこの調子である。カエルや蝉の合唱のように電話はひっきりなしだ。

さきほどから聞こえる電話の内容からもあまりいい電話でないのは一目瞭然。仕事のキャンセルの電話もすでに数件入っているようだった。

ちらりと画面から目をそらし、俺の机の右隣、赤羽根さんの机の上に置いてある雑誌を盗み見る。
この大騒動の原因にもなった一冊の雑誌があった。
昨日、ミズキの家にいた俺たちの下へと駆けこんできたＳＳＫの手に握られていた雑誌。
そのあるゴシップ記事が今回のこの騒動の原因であり、俺の苛立ちの原因でもある。
「すみません、真のお兄さん」
「はい、なんでしょう」
秋月さんに呼ばれ画面から顔を上へと上げる。秋月さんは通話の切れた受話器を右手に抱えていた。コールが鳴らないように配慮しているのだろう。
「大変申し訳ないのですが、今日ライブをやっていた竜宮小町の迎えを頼んでもいいでしょうか？　タクシー使ってもらって構いませんので……」
秋月さんは申し訳なさそうに頭を下げながら言う。そのくらいなら大丈夫だ。むしろ、いつもやっていることだし、それにここまま下手なキーボード裁きだと終わるものも終わらない。
「いえいえ、それくらいなら大丈夫ですよ」
「本当にすみません。わざわざ今日も休みなのに出てきていただいてますし……」
「いえいえ、気にしないでください。こんな大変な時にバイトとはいえ、ゆっくり休んでいるなんてこと出来ませんよ」
そう俺は笑顔を作り、立ち上がる。不謹慎だと思われるかもしれないが、逆境の時に大切なのは笑顔を見せることだ。逆境に飲まれてはいけない。暗いことばかり考えても起きてしまったことは、もうどうしようもないのだ。
だからこそ俺は自分の感情を隠し、笑顔の仮面を被る。もう既に慣れたものだ。
「ありがとうございます」
俺の内側を露ほども知らない秋月さんは俺に習い笑顔を作る。動

揺がまだ表情に浮かんでいるが、まぁ及第点だろう。
受話器を手に取りながら頭を下げてくる音無さんに俺も会釈を返し、奥の机に座っている高木社長に頭を下げると、俺はスーツの上にコートを羽織った。
そして、
「この雑誌移動中にもう一度読み直したいので持って行ってもいいでしょうか？」
そう聞くと俺はナムコプロダクションの扉を開けた。プロダクションの外には多くの記者が待ち構えていた。
その記者達の目を掻い潜るようにコートを着て深く帽子を被った俺は裏口から出てタクシーに乗り込んだ。
その車内。例の記事を読みながら考える。
千早ちゃんは大丈夫だろうか……高校生の彼女にあの記事はショックだった筈だ。あそこまでプライベートに踏み込んだ記事を書かれれば大人だって辛い。
赤羽根さんいわく昨日の彼女はこの記事がすべて本当だと認めたそうだ。昨日の時点ではどうにか大丈夫そうに振る舞っていたそうだが、一日時間が空いた今日はどうなる……。考える時間があるというのは時にそれは残酷な結果を生むこともあるのだ。幸いにも今日は午後からの歌のレッスンしか入っていないようだし、それには赤羽根さんが付き合っている。何かあっても赤羽根さんがいればどうにかなるはずだ。
弟の死、家庭崩壊、両親の離婚……。確かにこれだけ続けば、普通の人なら十分に不幸を連想するだろう。
認めたくはないが、その点はこの記事はよく書いてある。大衆のイメージ操作が上手い。
事実ネット上では千早ちゃんは不幸を呼ぶアイドル呼ばわりだ。
俺も何か出来ることがあれば力になりたいが、今のところ出来るのはいつも通りのことだけだった。
それに、と俺は改めて頭を切り替える。
昨日、ミズキの家であの記事を見た瞬間から分かっていた。

――本当にこの記事で危ないのは如月千早じゃない。
昨日の段階では上手くごまかせていたようだが、この記事と世間の様子を見て彼女の精神がどこまで持つか……。恐らく千早ちゃんに何かあれば間違いなく彼女は持たない。強い精神力を持つ彼女のウィークポイントはこの記事で間違い。
俺が真の意味でフォローすべきなのは彼女なのだ。如月千早ではない。そこをはき違えるな。
この記事で一番ショックを受けたのは
――真、大丈夫か……？
俺の妹である菊地真だ。

当たって欲しくない予感ほどよく当たる。俺が改めてそのことを実感したのは、竜宮小町の面々とナムコプロダクションに帰ってきた時だった。
――如月千早の声が出なくなった。
何でも精神的ストレスのせいだとか。付き添いで一緒に病院を訪れていた赤羽根さんからはそう説明された。そして、この話は高校生以上のアイドル全員に電話で伝えられたということも。
声が出なくなる。それだけのストレスが千早ちゃんを襲ったということだった。
俺は昔、ストレスで声が出なくなった少女を知っている。
脳裏を過るのは血溜まりで呆然と立ち尽くす少女。

あの時は一か月声が戻ることはなかった。その時のショックほどではないにしろ千早ちゃんの声がいつも戻るのか、それはまだ分からないそうだ。

ナムコプロを出た時には既に深夜と言ってもいい時間帯だった。あれから電話対応に追われバタバタとして結果この時間までかかってしまった。どうにか終電の一本前には間に合ったが、家の前に辿りついたときにはすでに深夜の一時を回っていた。

脳裏に浮かぶのは一人の少女。出来れば彼女にだけはこのことを知られたくはなかった。

しかし、遅かれ早かればれることだ。彼女には乗り越えて貰わないといけないことだ。

やはりと言うべきか部屋の鍵は開いていた。

明かりはどこもついてなく、周囲は闇に包まれていた。

リビングに入り、照明をつける。

「ただいま、真」

俺の言葉にリビングのソファーに座っていた真は顔を向ける。

まるで心ここにあらず。そんな表情だった。

そして彼女はこう言った。

「ねぇ、兄さん……。千早はきっと辛かったと思うんだ。目の前で弟が死んで、そして両親も離婚してさ……。そんな千早が不幸を呼ぶアイドルなら

――――――――〃

〃なボクは一体何になるんだろうね……？　死神かな……」

暗中模索

ふぅ、と一つ息を吐き、大きく伸びをする。あの記事の発売から今日で三日。７６５プロダクションは今までにない雰囲気に包まれていた。

７６５プロダクションが発足してから初めての緊急事態。悪意のあるゴシップ記事。

タチが悪いのはその記事が真実だということだった。でまかせで、出鱈目な記事なら何とでもごまかしが効く。しかし、何よりもその如月千早本人がその記事を事実だと認めていた。

そしてその千早を襲った声がでなくなるという症状。（正確には歌おうとした時だけ声がでないようだ。俺自身としても本人と会ったわけでもなんでもないので、ただ赤羽根さんと春香ちゃんから聞いた人づての話だ）

はっきり言って今のナムコプロダクションの雰囲気はここでバイトをし始めてまだ半年と経たない俺の目から見ても良くないことは一目瞭然だった。

それに……。

と、考える。脳裏によぎるのは昨日の夜の話。

昨日、俺は何をすべきだったのだろう。どう行動すればよかったのか。いや、こんなことは考えるだけで無駄である。考えるべきはそこじゃあない。

俺が考えるべきはなぜもっといい方法があると〝知りながら〟その方法をとっていないかだ。

違うな、それすらいい訳だ。どうしようもない俺の内心から出る見たくもないものへのいいわけだ。

俺の好きな小説の一文にはこうある。

『恐れてはいけません。暗いものをじっと見つめて、その中なら、あなたの参考になるものをおつかみなさい』

しかし、俺のこの感情はじっと見つめたところで参考になるものはないだろう。

俺の真っ黒な暗いものはもはや闇といってもいい、怪物と言い換えても問題ないほどの闇だ。なら、この言葉の方がここではよっぽど正しいだろう。

『怪物と戦うものは。その過程で自らが怪物と化さぬように心せよ。深淵を覗くとき深淵もまたお前を覗いているのだ』

だからこそ俺は怪物にならないように、闇に引きずり込まれないように、怪物を見て見ぬふりをした、闇をないものにした。それが俺自身がこの数年で身に着けた自己防衛だった。

その結果がこのもうどうにもならず、なるようにしかならないこの状態だとしても……。

「ねぇ、お兄さん……。千早ちゃん大丈夫かな……？」

少し、そんなくだらない考えに思いを寄せていた俺に声が一つかかる。ふと、声がする方を見れば、会議室のソファーに座る春香ちゃんが心配そうに呟いていたのが目に入った。

「……うん、大丈夫だよ」

娘の様に思っている我が妹の真と同じ年の春香ちゃん。その心配そうな問いかけに俺は何も気の利いたことを探し出すことが出来ず。ただ歯切れの悪い言葉を繰り返す。

情けない。

ただそれだけだ。彼女たちよりも長く生きているというのにかける言葉が何か分からない。励ます？　慰める？　希望を持たせる？

その全てが正解に見えて、そのどれもが間違っているように見える。だから、こそ俺は中庸に中道に、間をとって無難な言葉を返すことにした。

もっと、確実良い道があると確信しながら……。

「で、でも、昨日はあんだけ思いつめたような顔をしていたし……」

春香ちゃんと雪歩ちゃんは赤羽根さんと一緒に千早ちゃんの病院に付き添ったんだったな。

それだけ春香ちゃんと雪歩ちゃんのショックは一入だろう。

「……」

「それに今日は事務所にも来てないし……」
いつもの太陽の様な明るい笑顔を潜め、どんよりとした曇り空のような表情だ。それはそうだ、一番と言ってもいいくらいの親友が事務所にこなければ誰だって心配になる。
一応千早ちゃんの扱いだが、体調不良ということで一週間ほどの休みを各関係に貰っている。ゴシップ記事が出た後にこの不自然と言っていいほどの体調不良。何かあったと公言しているようなものだが、本当に重大な事件が起こっているためどうしようもない。焼け石に水だが、水はかけないよりもかけたほうがましだ。
色々と勘ぐられそうだがこればっかりは他に手の打ちようがないのだ。
もちろんそんな暗いオーラを放っているのは春香ちゃんだけではない。千早ちゃんの留守を守ろうといつも通り仕事に行ったメンバーも血色の悪さを隠せないでいた。
千早ちゃんがいない765プロ。雰囲気も暗く最悪といってもいい。
しかし、それでもなお時間は進む。時は止まらない。落ち込もうが嘆こうが、時間は残酷に平等に流れるのだ。俺のすべきことはなにか。いやはっきりしている。千早ちゃんに元気になってもらうことだ。それが俺にとっても真にとっても最善になるのは間違いない。人の噂も七十五日。ゴシップ記事なんてものはすぐに風化する。
しかし、人の傷はどうだろうか……。
「大丈夫だよ。千早ちゃんは強いからね……」

俺のその言葉はいったい誰にかけた言葉だったのだろうか……。
「そうですね！千早ちゃんは強いですから！　私たちに出来ることは明るく振る舞って、千早ちゃんが帰って来た時に気持ちよく歌えるようにすることですね！」
春香ちゃんは明るくそう笑った。その笑顔を見ると少しだけ気分が楽になった気がする。
なるほど、これがアイドルか……。なんとなく、アイドルがここま

で人気の理由が分かった気がした。
「そうだね！　よし、今日は春香ちゃんは真と一緒にラジオの生放送か！　俺が付き添うから頑張ってね！」
「はい！　……そういえば真はどうしたんですかね？　今日はまだ見てないですけど」
会議室にかけられた時計を見ればそろそろ出発にはいい時間帯だった。昨日内に今日の予定は伝えてある。
それなのにまだ真は事務所に来ていない……。
昨日の夜のことが脳裏をよぎる。闇の中ただ虚空を見つめる少女。儚げにほほ笑むその美しい笑みはまるで直ぐに壊れてしまいそうで……。果実は腐る前が一番おいしい、線香花火は落ちる寸前ほど輝きを増す、人は壊れるまえが一番美しい……。
……大丈夫。
本日何回目かになる大丈夫という言葉。その三文字をまるで暗示のように心に刷り込む。
俺も真もまだ壊れていない……。
「ごめん！　遅れたよ！」
元気のいい声共に開かれる扉。そのの先には上から下まで俺のおさがりを着たいつも通りのボーイッシュな菊地　真が立っていた。よほど急いできたのかその息は少し荒く、髪は少し飛び跳ね、額には秋だというのにうっすらと汗ばんでいた。
「真良かった。時間に遅れるかと思って心配してたんだから！」
「ごめんごめん、春香に兄さん。ついついレッスン場でダンスの練習して体を動かしていたらいつの間にかこんな時間になって……えへへ」
バツの悪い笑みを浮かべ、真は笑う。その目にはしっかりと光がよぎり、その表情は普段通りだった。
「まだ時間にはなってないし大丈夫だよ。それより、真。髪が変な方向に飛び跳ねてるぞ」
そう笑いながら俺は真の髪を手櫛で整える。
「えへへ、ありがとう」

真は優しく微笑んだ。柔らかいその笑顔を見ながら思う。
――何か可笑しい、と。
いつもの真なら子供扱いしないでよ、とワタワタと慌てふためくというのに。
「……あぁ」
だからだろうか、俺はそのお礼にろくに返事を返せなった。
ここまで来て俺は、また何もしないという選択を選んでしまった。考えるという工程を排除してしまった。それが最悪の一手と分かりながら俺は、愚かな俺はまたしても、この最悪手を選んでしまったのだ。
「それじゃあ、兄さん、行こっ！」
俺の手を取るとそのまま引っ張る。
「ちょっと、真、早いって！」
力で真に勝てるはずもなく俺はズルズルと引きずられるようになるように事務所を出ていくのだった。
「ちょっと、真、お兄さん！　待ってください！　――あっ、ガラガラドシャーン!!　……いたたた……」
その後ろで大きな物音を聞いたような気がするが真についていくのが必至な俺はそれに何が起こったのか分からないでいた。

その日の仕事終わり、春香と雪歩は千早の住むマンションへとお見舞いに訪れた。
時刻は夕暮れ時、閑静な住宅街にある一軒のマンションは西日を受け黄金に輝いていた。春香、雪歩、そして真と千早はナムコプロの高校生組としてプロダクションの中でも中のいいメンバーであり、千早の家へも何度も遊び行ったことのあるメンバーだった。
そんな千早の部屋の前に立ち春香は横に立つ雪歩を見る。
「……うん」
雪歩と春香は目線を合わせ力強く一つ頷くと春香が代表してインターホンを押した。
「千早ちゃん、いる？　春香だけど」
「あっ、私もいます。萩原　雪歩です」
二人がしゃべり終わり数秒の時が流れる。昨日の今日である、あの件で一番ショックを受けたのは千早だった。歌うためにアイドルになったのに歌おうとすると声がでない。
そのショックはいかほどのものか。春香には想像もつかない。
しかし、計り知れないショックだったのは間違いないはずだ。
そんなことが昨日あったのだ。それに今日は事務所にも来てすらいない。誰にも会いたくないのかもしれない。
横を見れば雪歩をまた顔を落としていた。
また、明日出直そうか、春香が雪歩にそう提案しようとした時だった。インターホンから声が聞こえた。
「……なにかよう？」
小さいながらもその声は千早のものだった。
春香と雪歩はあっ、と声を上げる。
「うん！　一緒にダンスのレッスンに行かないかなと思って……」
「ほら、体動かすと気持ちいいって言いますし！」

春香に続くような形で雪歩が言う。声がでない千早に配慮して二人はダンスのレッスンに誘った。
「……いかない」
しかし、その誘いは短く断れた。
「あっ！　そうだ、みんから預かりものしてたんだ！　お茶とかのど飴とか本当にいーっぱい！」
「そうなんです！　春香も私も物を持ちすぎて、サンタクロースみたいになっちゃってんですぅ！」
春香と雪歩は765プロを代表して見舞い来ている。大勢で訪れても迷惑だろうと判断した結果だった。本来なら真もくる予定だったのだが、どうしても抜けれない予定が入ったらしく、今回は不参加だ。
春香と雪歩はみんなから預かった手荷物を見ながら明るく話す。荷物は本当に多く、手提げのカバンが二つ一杯一杯になるほどだった。その多さはそれだけ千早がナムコプロのアイドルに愛されているという裏付けでもあった。
「構わないで！　私はもう歌えない。みんなの気持ちに応えられないのもの……」
スピーカーから漏れるのは力強い拒絶の声。
「千早ちゃん、弟さんのために歌わなきゃって……。でも、もっと簡単じゃだめですか？　歌いたいからとか、歌が好きだから歌う！　じゃだめですか？」
「そうだよ、雪歩の言うとおりだよ！　歌を歌いから、好きだから歌うじゃダメなの!?　千早ちゃんともう一度歌えたら私も雪歩も嬉しいし、天国の弟さんも喜ぶと思うよ！」
「やめて！　雪歩と春香に私の何が分かるの！　もう、お節介はやめて！　もう何も話すことはないわ、帰って！」
その日千早が部屋から出ることはなかった。

同時刻。
夕日につつまれ色を変える町中を歩く、もうすっかり見慣れた通り。駅からナムコプロダクションへと向かう道だ。
「ねぇ、兄さん早く早く！」
何が楽しいのか真は笑いながら俺の手を引っ張る。
いつも通りアイドルの送迎も終わり、帰りは俺一人だからと電車で帰ってきた。俺一人ために経費で落ちるとはいえタクシーを使うのは憚られた。きっと俺の貧乏性は死ぬまで治らないだろうなとどうでもいいことを思う。
そして駅に着いた俺なのだが、そこに何故か帽子を深くかぶりマフラーで顔を半分隠した真がいた。理由は分からない。服装は変装のつもりだろうが、逆に不審者として目立っていた。そんな真は俺を発見するなり、俺の手を引きながら事務所までの道を歩くのだった。
「ちょっと、真。ストップだストップ！」
「えー！　何、兄さん！」
そんな真にストップサインを出して止まるように言う。
「まず手を離せ！　色々と見られたら不味いだろ……」
ただえさえ千早ちゃんのゴシップ記事の騒ぎの最中なのだ。そんな中アイドルと手をつなぐ謎の男の出現となれば、記者が見逃すはずがない。
「えぇー、遊園地の時は手をつないでたじゃん！」
「あの時と今では真の有名度合いが違うだろ……」
あの時も危なかったが、今はそれよりも危険だ。何といってもテレビで見ない日がないトップオブトップのアイドル、今年のアイドルマスターの候補にも挙げられているほどに真は有名になっている。
「だから手を離んだ」
「えぇー」
真は渋々と言った様子だ。
「こんなところファンや記者に見られたら殺されかねん」
これは比喩でも何でもない。菊地真の人気はそこまであるという

ことだ。それに裏路地を通っているとはいえ、どこに誰が潜んでいるのかわからないのだ。壁に耳あり障子に目ありとはよく言ったものだ。

「うーん……じゃあ、兄さん。今日は一緒に夜ご飯食べようよ！」

真の言葉に脳内の今日の予定帳を広げる。確か夜の予定はバイトだけだったはずだ。

「わかった。今日はこれで帰れるし、早めにご飯たべようか！」

「へへ、やりぃー!!」

ようやくその右手から俺を解放した。そういえば真とご飯を食べるのは本当に久しぶりだな。あの時から一緒に食卓を囲むことはなかったので、久しぶりに感じる。まぁ、時間があるときくらいは、一緒に食べるのも悪くない。ＳＳＫの部屋にも行ったばかりだし、ストックも結構ある。

「あの、菊地真さんですか……？」

そんな俺たちへ後ろからかけられる声。

まずい、記者か……？

そう思い振り返った先には一人の黒髪の女性。歳のころは真よりも二回りほど上だろうか。歳のせいか皺が少し目立つが十分に整った容姿を持つ女性。その目元や雰囲気は誰かに似ているような気がした。

「は「すみません、どちら様でしょうか？」

真が応えるまえに声をかぶせて質問しておく。記者ならそのままうやむやにしてしまうつもりだ。

人ひとり巻くくらいの話術は持っていると自負している。

「いきなりすみません。私は如月千早の母です」

その言葉で納得する。雰囲気や目元は千早ちゃんそっくりだった。

「千早さんのお母さんでしたか……すみません。私は７６５プロでバイトしている者で、彼女が菊地真です」

名刺を取り出し千早ちゃんのお母さんに渡す。いつの間にか小鳥さんと社長が作っていた俺の名刺。肩書はプロデューサー代理。いや、いいんだろうか、ただのバイトの名刺にプロデューサー代理って。

まぁ、そう呼ばれることが確かに多いけれどさ。
「菊地真です。それにしてもよくボクが菊地真だとわりましたね？」
俺の言葉に続くよう真も一つ頭を下げる。
確かに今の真の恰好は俺のおさがりに首元にはマフラーそして帽子。どう見てもアイドルというより不審者だ。
「ご丁寧にありがとうございます。ええ、千早から菊地さんはこの服が気に入っていていつも着ているって写真を見せてもらったから……」
「千早さんの記事の件は申し訳ありません。私たちがもう少し気を配っておけば書かれることがなかったかもしれないのに……つもる話もあるでしょうから、事務所の方へどうぞ」
ここから事務所までは歩いて目の鼻の先だった。
「いえ、それは結構です」
千早ちゃんのお母さんはやんわりと俺の申し出に断りを入れると、手に持っていたカバンから何かを取りだす。
「すみません、悪いんですが菊地さんからこれを千早に渡して欲しいんです」
「これは……？」
真は渡されたものは一冊の自由帳。
「亡くなった息子のお絵かき帳です」
「千早の弟の……」
真は手にもつ一冊の自由帳を見る。その瞳は一瞬光を失うが、またすぐに戻った。そのことに気付いた人物はここにはいなかった。
「これはボクが渡すよりもお母さんから渡してあげてください。その方が、きっと……」
「いえ、私は……。きっと顔を合わすだけで喧嘩になってなるだけなので……」
「で、でも……」
「無理なんです」
「え……？」
「今更、信頼なんて、ものは……私たち親子は、ずっとそうでしたから

……私に出来ることは、これくらいしか、あの子の事、どうかよろしくお願いします。それとプロデューサー代理さんもお時間いただいて申し訳ありませんでした。それでは」
そうまくし立てるようにして千早ちゃんのお母さんは去っていった。
一瞬見えた去り際の表情は悔しさを帯びていた。俺にはそれが良く分かった。俺も真という半ば娘のような存在が要るおかげで千早ちゃんのお母さんが、自らの娘のことで他人を頼るのがどれだけ悔しいのか、悲しいのか、憂いを帯びるのか、そのことが良く分かった。
しかし、とも考える。千早ちゃんのお母さんのあの言葉、きっと悪手だったのだと。母親という存在のあの言葉に彼女が反応しないわけがない。
「とりあえず、事務所に入るか……」
「……」
「真、早く行こうよ」
「あっ、うん」
二回目の問いかけでようやく顔を上げた真は俺の横まで駆け足でくると、
「ねぇ、兄さん。これは兄さんから渡して欲しんだ。ボクが渡すと……」
俺は黙って真から自由帳を受け取った。どういう行動をとるのがベストなのかを考えながら……。
もちろん一番いいのは今すぐにでも千早ちゃんが笑顔を取り戻し、歌を歌えるようになることである。
春香ちゃんたちは上手くいくだろうか……。765プロを代表してお見舞いに行った二人を思いながら空を見上げた。ビル群に囲まれて夕日は見えなかった。